文樂座人形淨瑠璃

初春興行

一部金十五錢

文樂座

昭和第十年の春を迎へて

文樂の初春興行

通し藝題の妙趣溢然!!!

吾等大和島根のくにたみは爰に昭和聖代第十春を迎へてその光り輝く御稜威の鴻大無邊なるに感激すると倶に益々國威發揚に邁進せればとはみなさまの年頭の御感としてその御健康を御欣び申上げます。

爰に鄕土藝術文樂座の保存にひたぶるの努力をつゞけ奮鬪また健鬪をつゞけ來つた文樂座人形淨瑠璃の一同はこの佳き初春にあたり、新春劈頭まづ至藝を以て今年の御愛顧をお願致さんとするところでございます。初春を壽ぐ『菅原傳授手習鑑』の通しに津太夫の松王古靱の梅王土佐の櫻丸といふ一世の掛合車塲の段は蓋し當代一の壓卷御聲援の益々厚からんことをお願ひ致します。

昭和十年一月

四ツ橋

文樂座

昭和十年一月二日初日

初日　午後零時三十分開幕

二日目より　午後一時開幕

二日目よりの

・御觀覽料・

一等椅子席　御一名　金三圓

二等席　御一名　金一圓三十錢

三等席　御一名　金七十錢

一等お座席　御一名　金三圓五十錢

一等お座席
一等椅子席は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符專用電話　南四七一一番

電話　南三〇三二番
三七八八番

お草履の準備は御座ぬますが、靴、草履はそのまゝ御入塲出來ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌へカツト廣告御掲載希望の向は文樂座編輯部へ希ます

あらゆる印刷

永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目

電話土佐堀㊹長三八〇三・番三九三四
番一四九四・番〇四九四

堺筋出張所・東區南本町二丁目

電話船場四九四〇番

三味線

昭和十年一月興行

文樂座人形淨瑠璃

一月二日初日

二日目より毎日午後一時開幕

二日目よりの豫定時間表

（左記時間は豫定につき日により多少の變更は御諒承願上候）

前

菅原傳授手習鑑　大序　御殿より寺子屋まで

大序　御殿の段　幕間十分（午後一時より一時十五分まで）

加茂堤の段（一時二十五分より一時五十分まで）

筆法傳授の段（一時五十分より二時五十五分まで）

築地の段　幕間十分（二時五十五分より三時十分まで）

杖折檻の段（三時二十分より三時五十分まで）

東天紅の段（三時五十分より四時十分まで）

亟相名殘りの段（四時十分より五時二十分まで）

幕間十五分

車引の段（五時二十五分より六時五分まで）

茶筌塲の段（六時五分より六時三十五分まで）

喧嘩酒の段（六時三十五分より六時五十分まで）

櫻丸切腹の段（六時五十分より七時四十五分まで）

幕間十五分

天拜山の段（八時より八時三十分まで）

寺入の段（八時三十分より八時五十分まで）

松王首實驗の段（八時五十分より十時五十分まで）

幕間十分（十時十五分より十時三十五分まで）

切

御代の春壽萬歲

吉春菅原繁昌記

――文樂土産の五――

木谷蓬吟

◇初春の吉例興行として、昔から多く上場される狂言は千本櫻か妹背山か、中にも菅原が一等多く選ばれてゐるやうだ。大衆向きの名狂言として忠臣藏に次いでの流行兒で、初演の延享三年から約百九十年の今日まで、まだ其聲價を墜してゐないのは、他の多くの戯曲が消長常なく舞臺生命の短かいのに較べて、驚歎に値するではないか。

◇特に多く初春のお芽出度い興行に拔選されるだけに、そも〳〵初演の當時から大好評大繁昌の盛運を見せた吉兆の名作であつた。延享三年八月廿一日の初日から翌四年の四月三日まで、さつと八ケ月間大入を續けたものだ。この評判が江戸へ飛んで、堺町の豊竹肥前掾座から見學の爲め太夫や人形遣ひが來阪し、竹本座其まゝを模して興行、大成功の記念に神田紺屋町に菅原屋敷を作つたり、亀井戸天神境内へ紅梅殿を建立したなど、東西呼應して菅原萬歳の喊聲を揚げたものだ。

◇殊更に大阪で、人氣を煽つた一つの原因は、この作の生命でもあり一大色彩でもある梅王松王櫻丸の、三ツ子の兄弟を扱ふた點にあつた。普通の兄弟でなく、又、二タ子でもなく、最も珍しい三ツ子の兄弟を仕組んだことが、滿都の好奇心を唆かしたものだ。それには又こんな現實の原因が潜んでゐた。

◇作者竹田出雲、並木千柳、三好松洛等の連中が、大近松の『天神記』を粉本に、各自に腦漿を搾つて『菅原傳授手習鑑』の趣向立てに苦心しつゝある最中、圖らずも一つのニュースを耳にし

た。それは、七月廿八日（延享三年）の事實、大阪天滿瀧川町（天滿天神社の東南二三町）で、世にも珍しい三ツ子、而かも健全な男子ばかりが、一齊に產聲を上げて生れた。此上もない祥瑞だとあつて鳥目五十貫を下賜され、嘉例に依り朝廷の牛飼に召され光榮を施したと云ふ話、忽ち大阪町中の大評判となつて傳唱せられた。

◇このニュースが、敏慧な作者達の筆に移されて、梅松櫻の三ツ子の同胞が舞臺の上に活躍することになつた。惣髮に、黃の群內縞、紅の丸クケを締めさせ、『車引』に三人兄弟の爭鬪を見せ『世にも稀なる三ツ子の舍人互に劣らぬ主思ひ』と花を持たせ、佐太村の段に『珍しい三ツ子の爺親、禁裏から御扶持下され、忰共は御所の舍人目出たい〳〵』と白太夫に說明させて、見物の大喝采を博した。作者出雲等は、いつも斯うした社會のニュースを活用して民衆と親しむことに怠らなかつた。それで三人兄弟の各持異の性格描寫は『天神記』の三兄弟から學んだものだが、梅松櫻の命名は源順の歌の改作『梅は飛び櫻は枯るゝ』から採り、梅王を長兄としたことは、この作の大序加茂堤や佐太村の文中にも示されてゐるが、松王が最も活躍してゐる關係上、自然と松王が長兄のやうに思はれてゐる、これは寺子屋の影響だらう。

◇大阪で唯一の人氣神、天滿天神の菅公を主人公に立てたところにも、また本作の好評を得た所以がある。天神祭が著るしく盛んになつた享保の頃から、竹本人形芝居の盛行に影響され、お迎ひ人形が三四尺の小型から一躍して六尺乃至一丈二尺になつたと云ふ一事に見ても、其相互關係の面白さが窺はれるが、その人氣神を利用して信者の見物吸收に苦心した。先づ菅公を使ふ吉田文三郎は每朝別火で食事し水垢離して勤め、人形は樂屋の荒菰の上に奉じて祀つた。大詰には舞臺に天滿宮の社を設け、菅公人形を正面に奉じ、一同神主の姿で禮拜し、賽錢雨の如く投げられたと云ふ事だ。其の見物、正直なる人多かり……と書いてゐる。

◇これも當代の流行兒『寺子屋』といふ社會の實相を捉えて、その有樣を活寫して見せ、更にこ

れを巧みに劇化させて見物を歡ばせた機智は、恐らく出雲の立案だと想ふが是れも全く的中の矢となつて働いた。當時幕府の書吏で門弟三千と稱せられた著名の書家建部傳内を、菅公の臣武部源藏と變名させ、主役の一人として登場活躍させたのは殊に妙案だつた。前記の江戸肥前座興行に、江戸全町の手習師匠に寺子屋惣兒を促し、大成功を收めたのも建部流盛行の賜であつた。この假空人物武部源藏何代目かの末孫武部源藏翁を、西大寺附近の農家に訪問した愉快な私の實驗談も持つてゐるが餘談だから省く。

◇本當を云へば、構想も文章も忠臣藏には及ばぬやうだが、觀た目の變化、各場面の色彩、趣向の多岐巧緻、舞臺功果の氣の利いたこと、繪畫的傳彩の美など、それに當代社會ニュースを巧みに採り入れることに由つて、うまく大衆の支持を贏ち得たものらしい。加ふるに此曲の特色としては、三味線章譜の優れた技巧的秀麗と云つたものをも擧げたい、道明寺、佐太村、寺子屋など殊に其各段切の節章は印象特に深いものがある。想ふに、三味線道の氏神初代鶴澤友治郎が、政太夫の播磨掾歿後休演中であつたを此興行から再出座とあつて、捲土重來の手腕を揮つて琢磨の章譜を點睛したものではあるまいか。更に一代の名人吉田文三郎が、人形操作や衣裳考案の上に人の見る眼を驚かしたことも、菅原繁昌の重要原因として數ふ可きものだらう。

◇かくて百九十年、幾百回かの上演に、歷代名匠の苦心工夫が積み上げられた事によつて、寧ろ作品以上に、名狂言としての聲名を擧げ得たものと思はれる。

菅原傳授手習鑑に就て

松瀨青々

この丸本の初を見ると「竹田出雲作」とあり、奥には「延享三年丙寅秋八月廿一日。

作者連名（並木千柳　三好松洛　竹田小出雲）」としてある。この年は西紀一七四六年で、近松歿後數へ年で二十三年に成る。作の特色は主なる一場宛を三人の作者が分擔して書いてゐる事である。これはその頃の新機軸流行であつたらしい。

二段目　道明寺（菅公と刈屋姫の生別）三好松洛
三段目　佐田村（白太夫と櫻丸の死別）並木千柳
四段目　寺子屋（松王夫婦と小太郎の死別）竹田出雲

右のやうな分擔で各工夫を凝らしてゐる。流石に斯道の老練者達が力一杯に書いてゐる丈けあつて、場面の變化と言ひ、叙情と云ひ、その呼吸の旨さは見物を知らず〳〵の内に藝術的夢幻の境中に引入れてしまふ。この作の興行には六十五日間の大入を取つた。此時の人形は有名な吉田文三郎が菅丞相と白太夫と松王の女房千代とを使ふてゐたといふ事である。

作の筋を見て行くと、道明寺は目先きの變化に重きが置かれてゐるやうで、土師兵衛と宿禰太郎の親子が時平方に内通して贋迎を仕立てゝ、菅丞相を奪ひ殺さんとしたが、結局それは齟齬したのだつた。輿に乘せ去つた丞相は思ひきや木像に成つてゐた。不思議ながら取り替ふべく道明寺に戻つて見ると、輿中には矢張り丞相が居られるといふ風な、人が木像に化し、木像が人に變ずるといふ變幻不思議な場面を提供してゐるのである。

佐田村の場、是は中々に詩的な場面で、遺愛の梅松櫻の三本の木が舞臺に若々しい春を漲らせてゐる。其處へ白太夫七十の賀といふので三人の嫁が來て雜煮を焚くやら、道にて摘んで來た嫁菜蒲公英で膾を拵えるやら、春霞その儘のやうなポウとした野情の掬すべきものがある。松王梅王櫻丸等の來るのが遲いといふて、三つの木を三人の子に準らへ、その木の前に蔭膳を据えるあたり、劇的でもあれば昔人のもの堅い而して暖い素朴な情が現れてゐて、見てゐて嬉しい場面である。また白太〇が決死の櫻丸を勞はる情の濃やかなる痛々しさが十分に斟み取られる。櫻丸の

命を助けんと三本の扇を持ちその嫁八重をつれて氏神に參詣に出て行くが、要するに此場面は神祇釋教戀無常が一時に疊まりうつくしき哀愁の交錯を見せる場面である。誰が目にも美くしからうが特に私共作句者に取つては人形が涙を絞るその場の中に櫻松梅が立つてゐるといふ事が無限の味ひを與へるものである。

寺子屋の場は手習子の親等が門口に迎に來る滑稽もあるが、それより進んで玄蕃と松王とが家に入つてからの空氣の緊張加減とその急迫の樣とは、見物をして息をも吐かしめぬものがある。さきの佐田村の悠々とした麗さに對比してこの場面は嚴肅と急迫の持つノッピキならぬ壓力に押し付けられるのである。前半に於ては源藏の妻戸浪の述懷が人生の歎を女らしく歎いて見せるし後半には松王の女房千代が覺悟の上で連れて來たいと〳〵しい我が子の上を慟哭する。この慟哭は凡そ人間の經驗する悲しみの中で最も深いものゝ一つで有るに違ひ無い。

以上はこの劇に就て所感の一端を申したのであるが、汎く義太夫淨瑠璃に就て私は斯ういふ風に考へられるのである。それは觀客の問題から始まるのであるが、中年老年の人達よりも青年の人達の中に將來ある觀客が得られるで有らうし、又得ねばならないのである。青年の人達が淨瑠璃を理解しないのは、理解しないので無い。理解する緣を造り與へ無いからである。謂はゞ食はず嫌いと言つた關係に置かれてゐるので、青年諸君も一回か二回、この魅力に接したならば最う忘られるものでは無いのである。

近頃の日本人は多少とも西洋的上は皮を被つてゐる。その頭腦で見るから淨瑠璃によく有る身代りといふ事は不都合だなぞと見えるのであつて、生え抜きの日本人に成つて考へて見れば何も不思議な事は無いのである。假りに乃木將軍の心事を敷衍して味はつて見ればその消息は分ると思ふ。本創の主人公菅公が一千餘年の昔に於て、唐末の衰勢を看破し遣唐使廢止の見切りを付けられた事がある。時代が移つて見切りを付けるといふ事はいつの世にも有るべき筈の事で、我等

は西洋の上は皮を脱して純なる日本人に立ち歸るのが今日の急務では無からう歟。
純なる日本人は活世間で捜さうよりこの淨瑠璃で見るのが捷路で、この舞臺に動く人形は完全にそれを失はずに持つてゐる。
またこの人形を見るたびに切に感ずる事であるが、就中松山人形に於てその動作と云ひ、その面持――造り付けの木偶にも人形使ひの妙技に依つて魂が宿るのである。――と云ひ、まことに日本女性のもの深い柔らかな情緒のしみ〴〵としたものが受け取れるのである。若し女性を研究するならば、淨瑠璃の人形に依つて日本の女性研究を爲るのが最も確かな急所を押へた事に成ると私は信じてゐる。
私共が義太〇の曲を讃美して止まないのは斯の如く我が國民性に溢れてゐる强みをやゝ知つてゐるからである。

「菅原」の通し狂言と現代

入江來布

文樂の新春本格興行に「菅原傳授手習鑑」の通し狂言が出る。この前には四年前の昭和六年五月興行に八年振りで出たが、今度は更に大序、清凉殿。筆法傳授、築地、天拜山などの場が擴ふて加はつて全く完璧の通しを見ることが出來るのは珍らしくもあるし、樂しいことである。
大近松の「天神記」からの推移や、この曲の竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の合作の逸話、或はその他の考證などに就ては木谷蓬吟氏等の專門家から承ることにして、この狂言の潤色のところ〴〵や、また今日の世間と通し狂言といふことなどに就て少し所感を叙べて見たい。

歌舞伎でも、淨瑠璃でももとの起りはまことに單純なものであつたが、次第に發展するにつれて筋も複雜となり、表現にも變化が多くなつて、殘もの、通し狂言の大がゝりとなつた、大がゝりなり變化をよろこぶためにこの「菅原」や「忠臣藏」のやうに作者が持ち場〳〵を分擔して合作連作に力を競つたものも出來た。勿論豫め梗概に就て打合せるのだけれども、作者々々の自由な趣向も交へるし、個性も出るから、どうしても合作のものは筋の一貫せぬところはあるが、その代りに各段變化があり、各々獨立の素質をもつてゐて面白い、そこで通し狂言を繰返してゐるうちには、各段のうちで特に興味の集中した場面、たとへばこの「菅原」の寺子屋の段とか「忠臣藏」の茶屋場などが、切離されて獨立して上演せられるやうになる、文樂では矢張り傳統的に通し狂言、若くは數段つゞきものを上演するけれども、近年の歌舞伎芝居では「忠臣藏」以外殆んど通し狂言などはやらなくなつた、私の少年の頃には芝居でも隨分長い續きものを演じて居て「小栗判官照手姫」などの看板をなつかしく回顧するが今は全くそんなものを見なくなつて了つた。さういふ風になつて次第に一幕物萬能となり、新作ものも一幕を目標に作るやうになつた、併し、今日靜かに觀察して見ると、どうも、その一幕演出にも趣味の行詰り、趣味の固定を否認することが出來なつたやうに思はれる、勿論多年篩ひにかけられたものであるのと、洗練の結果今日獨立上演される一幕の場面は、全段中で最も面白いところになつてゐるには違ひないが、その代りに技巧の極致に達し、筋がわかり過ぎて、舞臺の表現と、見物の要求とがもう既に見ぬ先きから固着して了つてゐる、「三勝半七酒屋の段」で「今頃は半七さん」と語りかけると、「待つてました」とやるのなどもその固着の惰性だと言つてもよい、斯ういふ行詰りの場合に、その興味を集中させた一幕の場面を、そこまでに盛りあげる前後の推移を併せて味ふといふことは、第一固着した趣味を緩和するし、鑑賞の對境も廣くなる、切られ與三郎の「源治店」ばかりに固着してゐたのが、始めて木更津の見初めの場からずうつと續きを見て、大いに新しい面白さを味つ

たときにも私は特に通し狂言の復興を思つた。人形淨瑠璃は特に全段通し狂言を演ずるのに都合がよいし、また屢々その機會がある「妹脊山」の全篇も文樂で見たのであるが、今度の「菅原」の通しも又その一つでその上演は同好者の樂みとしてよい。今日は淨瑠璃のみならず、歌舞伎劇に於ても一幕物から轉じて長篇ものへの動向を要求してゐるのではないかと思ふ、少くもそこに眼をつけることが先見の明と言つてよいのではないかと思ふ。この意味に於て文樂が昭和十年新春初一發の本格興行に「菅原」の通し狂言を出したことは劇壇全般に新機運を促すものと謂つてよい。

もう一つ今日の觀衆と通し狂言との關係に就て見遁がせないのは大衆文藝の旺盛に就てゞある今月は文藝と謂へば總べて「大衆」と冠詞をつけて扱はねばならぬほどに大衆文藝萬能であるが、通し狂言は今日の大衆文藝の所謂カンどころによく合致してゐる、純文藝のやかましい時には最も排擊された「荒唐無稽」が、大衆文藝時代では技巧上の表面的合理化を、頰冠りにして大道を濶歩してゐる、荒唐無稽の奇拔さと、藝術力に於ては今日の大衆文藝のそれよりも淨瑠璃の通し狂言に於ての方が遙かに優越を誇り得る、「菅原」の通しは「忠臣藏」の通しよりも一層この點に於て現代と觸覺を餘計にもつてゐると思ふ。

「菅原」の場面々々に就て謂ふと、一幕物の見せ場である「車場」は成る程美しくもあるし、纏つても居るが、これと對照して「加茂堤の場」が見方によつてはなか〳〵面白い、飄逸味もあり瀟洒でもあり、季感もよく漂つてゐるし、刈屋姫ととき世の宮の車の戀も思ひ切つて奇拔で面白い、無論全篇中の傑作たる「寺子屋」の堂々たることは當然であるが、それと共に「東天紅」と「相亟名殘り」の段などもその古典的な無遠慮な着想が昔しの芝居をさながらに髣髴させて實に痛快である、人形淨瑠璃文樂の保存が國家的にも鄕土的にも必要なのは斯ういふ妙味の猶存にもあることを閑却してはならぬ「茶筌洒の段」も季感が漂ひ、野趣もあり、梅王松王櫻丸三人の女

房たちがそれ〴〵に活躍するのもよい意匠である、「筆法傳授」と「天拜山」も對照して變化あり面白さ、悽愴さの添ふ段である。

全体の筋としての忠孝節義は、「忠臣藏」ほどに透徹して居ないが、それだけに復雜味があり、天神さまの信仰思想と、古典的な節義、華麗と悲壯の美感は却つて單純な忠義よりも現代人の思潮に合するところがあらうと思ふ、時勢と共に動がねばならぬ文樂と、その愛好家も先づ斯ういふ合流點の鑑味から漕ぎ出して往かねばならぬから、「菅原」の通しは、さういふ立場で今日の若い人々に呼びかけてよい、若い人々もまたその觀點から文樂を見直して貰ひたい。

「菅原」讃

寒紅梱冬櫻花の賑はしき
櫻木に雪ふりかゝるけしきかな
笹啼や松原ふかき思ひあり

通し狂言

前　梅ハ靈樹　桜ハ總藏　松ハ影向

菅原傳授手習鑑

御殿の段

大序　御殿の段　豊竹駒司太夫
加茂堤の段　竹本隅若太夫
筆法傳授の段　豊竹竹太夫
薬地の段　竹本津咲太夫
杖折檻の段　竹本土佐榮太夫
東天紅の段　竹本相瀬太夫
相亟名殘りの段　豊竹松島太夫
車塲の段　竹本津喜太夫
茶筌酒の段　豊竹駒若太夫
喧嘩の段　竹本越名太夫
櫻丸切腹の段　竹本土佐子太夫
天拜山の段　竹本隅壽太夫
寺入りの段　竹本津の子太夫
松王首實驗の段　豊竹宮太夫
竹本常子太夫
竹本津磨太夫

この淨瑠璃は延享三年八月竹本座初演に初まり、作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳等の合作で、當時竹本座の衰運挽回のために作者達は天滿宮へ祈願を籠め必死の覺悟で各自分擔書下したのがこの淨瑠璃で果然好評で翌年三月まで打續け、竹本座を再び隆盛にした因緣深い狂言である、殊にこの淨瑠璃に於て興味を覺ゆるのは『骨肉の別れ』といふ同じ題目の下に各持場を定めて筆を執つた即ち『道明寺（相亟名殘りの段）』は松洛『佐太村（櫻丸切腹の段）』は千柳『寺子屋（松王首實檢の段）』は出雲と三人の作者が腕比べをした逸話が胎されてゐる。

（床本）　大序御殿の段

蒼々たる姑射の松化して婥約の美人

竹本叶美太夫　竹本さの太夫　豊竹小松太夫　竹本隅榮太夫　豊竹駒尾太夫

と現はれ珊々たる羅浮山の梅、夢に清麗の佳人となる皆是さきして變化をなす、豈誠の木精ならんや唐土ばかり日の本にも人を以て名付るに松と呼、梅といひ、或は櫻に准れば花にも情、天滿大自在天神の御自愛有し御神詠、末世に傳へて有難し、此神はまだ人臣にましますとき菅原の道眞と申し奉り文字に達し筆道の奥儀を極め賜へば才學智德兼備はり右大臣に推任有り、權威にはびこる左大臣藤原の時平に座を列れ菅亟相と敬まれ君を守護し奉らる延喜の御代ぞ豊かなる。

豊澤團伊三　豊澤仁平　竹澤團二郎　鶴澤鶴太郎　鶴澤友駒　鶴澤友太郎　鶴澤道造　野澤市之助　鶴澤清若　豊澤新太郎　豊澤廣二　野澤勝芳　鶴澤友花　豊澤仙作　豊澤仙三郎　野澤吉季　鶴澤友三郎

かゝる所へ瀧口の官人庭上に頭をさげ今度渤海國より來朝せし唐僧天蘭敬が願には唐土の喜宋公、我が日本の聖德を傳へ聞き何とぞ尊顏を拜し奉り御姿を畫に寫し歸國せよ、其畫を則日本の大君と思ひ對面せんとの望みに付き數々の贈物、則ち是に候と庭上に飾らされば菅亟相聞賜ひコハ珍らかなる唐僧が願、最も我大君は聖人にてまします事疑れなく御繪姿を拜せんと唐土の望は直に我國の譽なれ共打惡敷大君樣御惱有るの儘に言聞かせ音物も唐僧も唐土へ歸されんや、時平の了簡ましますがと仰に冠打振つてそふでない道眞、御病氣と申し聞かしてもよも誠には思ふまじ、御形代を拵らへ君と偽はにり唐僧拜さすれば何事なふ事はすむ、誰彼と言はんより此時平がかばりを勤め對面せんと一ト口にいひ放す謀叛の崩ぞ恐ろしき。亟相時平に向はせ賜ひ、時平の仰は天下の爲、

奉り御姿を畫に寫し歸國せよ、其畫を則日本の大君と思ひ對面せんとの望みに付き數々の贈物、則ち是に候と庭上に飾らされば菅亟相聞賜ひコハ珍らかなる唐僧が願、最も我大君は聖人にてまします事疑れなく御繪姿を拜せんと唐土の望は直に我國の譽なれ共打惡敷大君樣御惱有るの儘に言聞かせ音物も唐僧も唐土へ歸されんや、時平の了簡ましますがと仰に冠打振つてそふでない道眞、御病氣と申し聞かしてもよも誠には思ふまじ、御形代を拵らへ君と偽はにり唐僧拜さすれば何事なふ事はすむ、誰彼と言はんより此時平がかばりを勤め對面せんと一ト口にいひ放す謀叛の崩ぞ恐ろしき。亟相時平に向はせ賜ひ、時平の仰は天下の爲、

鵜澤友丸　鶴澤清友　鶴澤綱治　野澤市松　豊澤猿一郎　鶴澤綱延　野澤勝之助　豊澤廣男　鶴澤一郎右衛門　鶴澤重次郎　鶴澤小重　豊澤猿若

人形

菅原道眞　吉田榮三　藤原時平　桐竹門造　齋世の君　吉田文二郎　天蘭慶　吉田多三郎

御形代とはさる事なれ共若や彼僧相人にて君臣の相を能く見るならば孫君にあらぬ臣下としろべし其時如何仕らん、暫しが間御思案あれ所詮尊主の御かはり人臣は成り難し、幸ひ御同腹の御弟君齊世の君を今日一日の尊主と仰ぎ御姿畫を唐土まで傳へて恥ぬ御粧ひ、此義如何と理に叶ふ、詞に違ふ時平が工み目と目を三善の清貫も口あんごりと明居たる玉垂深き一間より伊豫の内侍立出賜ひ兩臣の御爭ひ我君委しく聞し召され予がかはりは齊世の弟と直々の御詔にて只今御衣を召替賜ふ、此由申傳へよとの仰にて候ふと内侍は奥に入賜ふ。

暫くあつて官人が案内にて渤海國の僧天蘭敬、倭朝にかはる衣の彩、庭に覆ひて畏まるム〳〵唐土の僧天蘭敬とは汝よな、尊顔を寫し奉らんとの願叶ふは汝が身の大慶、有難く存じ奉れと時平が差圖に取次の聖諸共に高々と簾卷上る其内には、御弟齊世の君御衣さはやかに見へ賜ふ貫に上孫の印とて唐僧始め座列の官人あつとひれ伏し敬へり、天蘭敬漸頭を上げつく〴〵と拜し奉りハーア天晴れ聖主候や我國の喜宋公墓はるゝも理りなり、三十二相備はつていはん方なき御形ち勿体なくも僕が筆に寫し奉らんと用意の畫絹、硯箱檜の木燒筆さら〳〵と眉のかゝり額際見ては寫し書ては拜し御笏の持せやう御衣の召ぶり違ひなく速席書の早さ顔輝が子孫が只ならぬ畫筆の妙を現はせり、道眞公仰せには重て奉

加茂堤の段

櫻丸　豊竹辰太夫
女房八重　豊竹竹太夫
梅王丸　豊竹千駒太夫
松王丸　竹本津の子太夫
三好清貫　竹本淀路太夫
齊世の君　豊竹小松太夫
苅屋姫　竹本さの太夫
豊澤猿太郎
鶴澤寛市

人形

舍人櫻丸　桐竹紋十郎
女房八重　吉田扇太郎
三好清貫　吉田榮三郎
齊世の君　吉田文二郎
舍人松王丸　吉田榮三
舍人梅王丸　吉田玉松
苅屋姫　桐竹紋太郎

錄湯てんぞ旅館に歸れと御下知を受けた繼春殿玄蕃お暇申させ唐僧を伴ひてこそ退出す、歸るを待て時平大臣階座にかけ寄り齊世の君の肩先摑んで引ずり出し、御衣も冠もかなぐり〳〵、唐人が歸つたれば暫くも着せてはおかれぬ九位でもない無位無官に着せた裝束此冠穢れたも同然御殿に置かず、我が預かる、今日の次第は右大臣奏聞せられよ、身は退出、罷り歸ると御衣冠、奪取つて行んとす、道眞立て引取賜ひ聊示の時平仰もなき御衣冠、私に持歸り、過まつて謀叛の名を取賜ふやと何心なく身の爲をいはるゝ身には胸に釘頭ゆがめて閉口す、齊世の君菅亟相に向はせ給ひ上尊序の仰せには老少不定極りなし何時しらぬ世の中に名ばかり殘すは其の身爲、道を殘すは末世の爲、妙を得たる筆の道、傳ふべき惣領は女子なれば是非に及ばず幼ければ弟の菅秀才にも傳ふまじ、弟子あまたある菅亟相器量を擇みて筆道の奥儀を授け長き世の寶とせよとの御事と仰せの中に道眞公、襟を繕ひ、こは有難き君の恩、我筆法の大事には神代の文字を傳る故七日の物齊み七座の幣神道加持に唐、倭文字は何萬何千にも我等道に洩しはなし、それ共しらず爰かしこに手習子供も皆我弟子けふより私宅にとぢ籠り、擇み出し器量の弟子に筆傳授け申べしと宣ふ詞は今の世に傳へて殘る筆ツ道の道は御名に現はれてまことなるかな誠なる君が御代こそ。

（床本）

引捨る車は松に輪を休め、舎人二人は肘枕二輛並べし御所車かたへは藤原かたへは菅原代は左中将

一 希世。時平公の代参は三善の清貫。加茂明神へ御願の祈願。

二 道真公の名

神子が湯浴の其の間眠るむまさは加茂堤、夢に夢をや結ぶらん、松吹く風に菅原の舎人梅王丸目をさまし、コリヤやい松王丸そちが主の時平公は短氣者でも根が大鳥。名代にわせた清貫殿は短いくせに根が悪者呼使を請ぬ内目を覺して行かいでな、ホウ梅王の云ゝ事はいのこなたの主の名代に來た希世殿こそ大邪人。蓼喰ふ虫も好き〳〵とあのわろを弟子にしたら代参におこしたりなさる。菅亟相のお心がしりたい。イヤそりやそち達が少さき了簡とは違ふ聖人の胸の廣さ。

はこちらが身にも覺の有ること。さき世の宮様の車を引櫻丸とわれとおれと三人は世に希な三ツ子。顔と心はかわつても着るものは三人一つしよひよんなもの産だと親父が氣の毒に思ふたをお聞きなされ三ツ子は天下泰平の相舎人にすれば天子の守りとなる成人さして牛飼に差し上げよと。菅相亟様のお取成で御扶持迄下され。親四郎九郎殿は今佐太村の御領分に御寵愛の梅櫻松を預り安樂に暮して居らゝ其ちようあいの三木の名を我々にお付なされおれを兄のお心でか梅王丸とお呼びなされて召使はる。其の方は松王丸櫻丸は宮の舎人ゑぼし親といふ御恩のお方、家をへだて〻奉公する共、必仇疎に思わぬがよいぞよマヽ

くど〳〵〳〵と永談義供人もふさき世の宮もお參りなされ牛休めに櫻丸も來そうなもの。何んぞ用があるか。ハテ佐太村の親父殿から。來月は七十の賀を祝ふ程に三女夫連でこいと人おこされた。其の事いはふと思ふてソリヤ銘々に人が來てよふ知つて居る。思へば親じどのはおわづからづに子三人。と果報な人ではあるわいな。と兄弟ばなしの其の中へ同じ胤腹一時に生れて年もおなへどし、どれが兄とも弟とも梅と松とに櫻丸。三幅對の車引き、こかげに一輛引きすて〻堤の上から是は〳〵ふたりともゆつくりとして居る。御神事も早半過。呼立られぬ中に行つたらよかろと。まがほでいへば梅王丸、御しんじがすんだら宮様からお

立であるが。そちや又こゝへ何しに來た。イヤこちの宮樣は神司の方でお休憩ある故お立の程がしれぬ。こなたしゆの乘せて來た御名代の衆は禁廷の御用が有るさて立騷いで居たぞや。油だんして呵られまいといふに松王いか樣。役なしの宮樣と時平公の御目鑑で。御用繫き清貫樣とは違ふ。何時しれぬいざ行こと。車にかゝればヤレまて松王。清貫樣がお立有れば此の梅王がおともした希世の卿も同然。萬一お立でない時はあの大勢の群集の中へ二輛の車を引かけて、けがさしてもそこれても不調法は舍人の誤まり。一走りいて樣子を見て、とりにかへる迄の事。休んだかわりじやサアこいと。引連立つて兩人の宮居の方へ走り行。あと見送りて櫻丸。ハ〳〵一ばいくふていたり〳〵と。獨言して相圖の手拍子招けば招かれ戀草のつゆふみ分けて十五六。被の風の優しきは菅亟相の御娘。かりや姫さて色も香も文は父御のお家がらくどきおとして宮樣にあわせませんと後に付く供は八重迚花めきし櫻丸か自まんの女房先へ廻りてコレこちのお人。首尾はよいかと問へばうなづきよい共〳〵。けふ此加茂堤は御車の休どころ人どめして一人も通さぬ。れづみの子もないしよと思ひ、宮樣をそびき出して來た所に梅王丸や松王がどんぐり目玉にほつと。くたびれ。一生につかぬうそを又ついてまんまとちらして仕廻ふた姫君さまはづかしそふな顏せづとも。おいで〳〵ドリヤ開帳つかまつらふと。車のみすを引上ぐればとき世の宮は面はゆげに姫はなほしも顏見合せにつと笑ふて袖おほふ。サア爰らが下々と違ふて、とび付かして輕業もさせにくい。女房どもくらやみにしたひなあ。何んのいな。ひるじやさて結構な車の內エ〻すばやいやつでは有るぞ。我等はしばしおいさまと。こかげへはいればそれ〳〵こんな時には男はじやま。サお姫さま。申上げたい事あらばえんりよなしにおつしやれと。つきやられて苅屋姫。千束の文の御返事に首尾有らばこの御すさみ有りがたいやら嬉しいやら。けふのこの首尾待かれて。おしかりうけに參りしと秋くわへて宣へば。とき世の宮も十七のいと、まだ若き初戀に何んといゝよる

品もなふ。櫻丸がいかい世話文見る度にいやまさり、あひたかつたに。よふこそ〳〵さぞ春風で寒かろと。後は姫の身にこたへ春風よりも戀風がぞつと身にしむばかりなり。車のかげより櫻丸ぬつと首出しこりや女房。早ふ配劑仕おらぬかと、せり立られてチヽそれ〳〵春風でお寒いとおつしやる憚り乍ら御車を暫しの内の風しのぎ御めん有つてと姫君を。むりに抱き上げ押入れ二人は飛退きこりや女房ども、有り樣は、そちが働きよふまあ、たづれあふたな。こなさんの敎への通り内裏上臈の形にやつし社家の内へずつといて姫君のおそばへ通り、櫻丸が女房八重でござりまするとと申上げたれば。あなたにも。待ち兼れてござつたかしてよふおじやつた。もふ、いこかと。こしもと衆を待して置て裏道から忍んでお出チヽ其の筈〳〵。此中から手ぐばいして菅相亟樣の筆法傳授に取こもつてござるを幸。お袋樣へ神參りと願はせ。おともの衆には、口藥、水まく樣にのましておいた。その水で思ひ出した。追つ付お手洗水がいろぞよ。神前の水汲んでこい早ふ〳〵とせり立てられて女房は、神前さして汲に行。後は氣休め一休みと思ふ所へ三善の清貫、官人仕丁に十手もたせ裝束卷上げかけ來り。ヤア夫におる櫻丸おのれ最前とき世の宮を、奉幣もすまぬ中連れ退いたその風ふん。何國へ供したサアぬかせと。せちがいかゝれば存ぜぬ〳〵。下として上の事。そちをとつくと尋れいとわせも立づ。ヤアぬかすまい。兼ておのれがさりもちにて、物くさい事きいて居る。さり分け今日は御腦平ゆの神いさめ、其の場所へ來て、不淨があるときつと、捕へて罪に行ふ、有樣に、ぬかさずば引きらへて拷問する、それ繩かけよと、下知の下、おつとり卷を、身がまへし。知ぬといふたら金輪際、ならくの底から、天迄しらぬ。れようじ召さると片つぱし。下手のお鞠のけて〳〵蹴踏。足のあんばい見せようかと、ぐつとふみ出す。兩足は、顏に似合ぬ古木なり。シヤ下郎めが味をやる。さい前から見る所が、車の内に人こそ有れ。みす引つちぎり改めよと、いふにしたがい、立寄る所を、首筋つかんで投退け〳〵車は舍

人があづかり物。命があらば寄つて見よと。かゝるをけとばしはねとばし、十手もぎとり、かたつぱし、なぎ立〳〵追て行。其の間に宮と姫君は人に見れて叶はじと、車の内より飛おり〳〵、さすが若氣の一筋に、のがれて旅のかり衣。何國ともなく落給ふ。すき間を見て清貫が、取つてかへして車の内、引明見れば内は明がら、南無三寶見ちがへた、舍人めが戻どつたら、大ていではあるまいと、下道さしてにぐるあとつまもなくかけくる櫻丸。御二方の見えぬにびつくり車を見れば、宮の書おき。何々見つけられて、はづかしめをうけふより、立のくとある文章にハツト驚き胸は板。イデ追つ付いて御供と、駈行向ふへ女房八重、サアこれお手洗くんできた、と見せるをはれのけ、ナニ手洗所か、清貫めが車の内、詮議せんと來りし故、見つけられじと二方は、何國ともなふ落なされた。ヤアそりやマア本かと女房は、びつくりぐわつたり、シテまあこ、なたは、こりやどこへ。ヤアどこどころか。元姫君は菅家の御養子。實母は河内土師の里、菅相亟の御伯母君。先此方へ心ざし、後をしたひ奉る。汝はあの御車を、宮の御所へ引て行、すておいては、後日のとがめ成ほど、そうじやこなさんの姿にやつして引て行、どれ白張とうけとつて、後案じすとも行かしやんせ。チヽ合點と白砂け上げ、飛ぶが如くにかけり行。八重ばやがて夫の姿。白張肩にひつかけて車の牛を引直し、させいほうせい〳〵一ばい引けどもおそい牛の足。エヽどんくさいと後からおせば車もくろ〳〵と。廻る月日は不成就日か、御二人樣のくえ日か、夫の爲には十方ぐれ鬼宿車をまだら牛、追つ立てゝこそ立かへる。

（床本）筆法傳授の段（日）

上根と稽古とすきと三つの中、好こそ物の上手とは藝能修行敎の金言、公務の暇明暮に好せ賜へる道眞公、堂上堂下は言に及ばず武家町人に至るまで風儀をしたふ御門人、數も限りもなき中に左中辨平希世、手習稽古ふる弟子此度筆法御傳授はさしづめ我等に極りしと勝手覺し御殿の眞中、朝の夜から机を直しだばこよ茶

筆法傳授の段

竹本源太夫
竹澤歌路
竹澤富助
竹本友造
竹澤むら太
竹澤大夫
竹澤團太夫
豊竹駒太夫
竹澤團六

よと呼立る聲もとゞかぬ奥勤め、女中頭が聞咎めコレお次に誰も居やらぬか、希世様の御用が有と呼次局に不足顔、コレ手の皮がひり付程叩いてもしゝらしん、ムウ合點、顔出しせぬは毎日來るを面倒がり言合せて鼻明すのか、けふで七日此手習、おれが爲ばかりじやない御子息の菅秀才は年弱七ツ傳授所へ行ぬによつて此希世が傳授して菅秀才の成人以後身共から又傳授さすれば主の奉公も同じ事、はつぽさいふて廻る筈、總じてこなたがなまぬるこいコレ〳〵勝野よふ心得や、そなた衆の不調法こける所は局が迷惑何おつしやるとあい〳〵とナ申希世様成程そふじやよい了簡、毎日〳〵氣を詰るも菅原の家の爲、けふも又此清書お目にかけてと指出すイヤけふは御赦され、赦させとはなぜ〳〵ハアテ幾度お目にかけましても亟相様の氣に入ぬはお手の業ではござるまい、取次の仕様の惡るさ手がはりにけゝは勝野、イヤ是そふはならぬ筆法傳授も神道の秘密事、學問所の注連が目に見へぬか、油こい女子はやられぬ、昨日までは氣に入ずと此清書は格別筆先に肉を持せ天晴骨髓を書得たれば傳授はする〳〵伸切ていてたもれと頼みに是非なく立て行、コレ勝野局の言れたあい〳〵を合點かアイ心得ておりまする、エヽ添い幸ひ邊に人もなし福德の三年め、屏風の影てついちよこ〳〵と取る手をふり切エヽいやらしい無体な事なさるゝと聲立るが合點かヲヽ合點じや聲立るがこ

人形

左中辨希世　吉田光之助
腰元勝野　吉田文之助
御臺所　吉田小兵吉
菅秀才　吉田文枝
武部源藏　吉田玉治郎
女房戸浪　桐竹紋十郎
菅相亟　吉田榮三
菊の局　吉田玉昇

はいとてしかけた戀人叶へおれとほうごだかへて連て行くアレ〳〵申、とは誰に申、マ御臺様や若君さま申〳〵と言聲のもれ聞へてや菅亟相の御臺所若君の御手を引立出たまへば希世は仰天是は〳〵悪い所へよふお出と手持無沙汰もへらず口、勝野に癪の療治を頼まれ取にかゝつてかくの仕合、御臺にも御存じの如く萬能に達せし某、世に希な器用者とて希世と付たは親共が自慢の名其例は此若君年よりは御發明菅秀才と呼賜ふも、秀はひいづる才は才智の才を取て菅家の公達、菅秀才、あら〳〵謂斯のごとし、我等は餘り器用すぎ取損ふたあんまのしだら御臺所の思し召がアヽ其言譯に及ませぬ、日頃の行儀知ているそんな疑ひ何のいなと物に隙ぬ御挨拶ア、それ聞て落付た今のしだらの次手ながらお尋れ申事がある御息女の苅屋姫齊世の君とにやほやした世間の取沙汰けふで七日相詰る、御所には何のさたもない空説かと存ずればどりや姫の御殿は明家、御詮議もなされぬは親御とても合點の上馳落でかなござるかと、問るゝつらさ御臺所暫し返事もなかりしが隠しても隠されぬ、さがなき人の口のはにかゝる是非なき苅屋姫齊世の君は猶以て大切なお身の上互ひに忍ぶ戀路の車、廻り逢せもそこ〳〵に、事現はれしを恥かしく思し召され御所へお歸りなされぬものと有て常の御方なられば、宮様附この人々がそれなりけりにはして置けまい、又此方も娘の事は希世様も知ての通りほんの母様は河内の國土師村の覺壽様とて連合の爲には伯母御様菅秀才を設けぬ先まで請て養子娘、此御所へ戻られず伯母様方へと心付自らが内證で尋れに人を遣はした、此へらくはけふが日までわざと父御へしらしませぬ、それも何故勅諚にて筆法傳授七日の中、參内止て取籠世の取沙汰は何にもしらず、傳授も過て聞賜はゞ嘸や悦びし賜はんと、かなたこなたを思ひやる心を推量してたべと案じ賜ふぞ理りなる、内玄關の奏者番、一間こなたに畏まり先年お舘に相勤めし武部源藏定胤尋參れとの仰により此間所々方々吟味致して漸、只今夫婦一緒に參りたり是へ通し申さんやと窺へば御臺所ヲ〳〵待兼し源藏夫婦早々爰へ參れとい

へ、コレ菅秀才源藏に逢間爰に居てば氣がつけふ、勝野を奥へ連て往て機嫌よふ遊ばつしやれ希世樣にも暫しが間チヽ爰に居て邪魔にならば所へ仕らんとつゞいて奥にぞ。

（床本）　筆法傳授の段（切）

人知れず思ひ初るが主從の不興を請くる種となる夫婦が二世の契りより三世の御恩辨へぬ不義より御所を追出されさむいくらしを素涙人おは打かれし武部夫婦けふのお召は心の優曇花ひらく襖の内外まで勝手は今に忘れれど身の誤りに氣おくれし膝もわな〳〵窺ひ足御臺の御座を見るよりもはつと恐れて飛しさり蹲まりたるばかりなり、ヤア珍らしい源藏夫婦連合の氣にそむき此御所を出やつたを數へればもふ四年日頃人を捨賜はず慈悲深ひ程きつさもきつい、思ひ切てはいかなこと見かへらぬ夫の心叶ぬ事と思ひの外源藏に參れとある御用の樣子何かはしらぬが氣遣の事ではあるまい定て吉相、ヤア自がいふ事ばかり、嘸待兼てござるで有ろ、源藏夫婦が參りしと誰ぞ奥へお知らせ申しやサア二人共に顔を上げ近をよりやハアテ遠慮に及ばぬ近ふ〳〵年月の涙人住居渡世が苦に成たか、昔の面影どこへやら源藏が着て居やるはあら〳〵しい下この着物戸涙はそれに引かへて小袖の縫箔さすがに女子の嗜みか二人の中に子も出來たかと問れて戸涙は有難涙、冥加至極もないお詞、主人のお目ねくらませし罰が當て苦勞の世渡り夫婦が着かへも一つ寶、二つも三つも朝夕の煙りの代になり果しやう〳〵殘せし此小袖は御臺樣の下されし御恩を忘れぬ寶殘り髪の銜りのべつこうもいつかはイスの引櫛とかはり果たる友かせぎ連合は布子の上糊立たぬ麻上下もけふ一日の損料借アヽおはもじお上みに御存知ない事まで身の恥現はす鐺刀、今日まで人手に渡さぬ武士の冥加、アイ女房が申上ます通り此ざまに成り下がれば一入昔の不義放埒恩ひ廻せば主人の罰、悔むに詮方なき仕合と夫婦諸共おろ〳〵涙折から局は奥より立出、お學問所へ召しますは源藏殿只一人御用濟んでお手の鳴るまで御臺樣にもお出はならぬとの仰られでござります、成程〳〵心得た源藏は局と同道戸涙は

こちへと入賜ふ只今御前へ召出さるゝ源藏が身の嬉しさ、こはさ、局ばかくと申上てたる障子明け渡せばうや〳〵しく注連引き榮へ常にかはりし白木の机欣然として座し賜ふ凡人ならざる御有樣、恐れ敬ふ源藏が五体の汗は布子を通し肩衣しぼるばかりなり、や〳〵あつて仰にはさりがたき仔細あつて汝が行衛を尋れしに住所さだかならずやう〳〵きのふ在家を求め今の對面滿足せり、其方儀は幼少より我膝元に奉公し天性好たる筆の道好に上り習ふに覺へ古き弟子ども を追拔天晴れ手書になるべしと思ひの外に主從の緣まで切て其風体筆取事も忘れつらんと仰に猶も恐れ入り御返答申すは憚りながら前髪立の時分よりお傍近ふ召し仕はれ手を書事は藝の司、書よ習へと御意なされ御奉公の間々、書覺へたと申すも慮外、蚯蚓ののたくつた樣に書手でも藝は身を助るとやら涙人の產業鳴瀧村で子供を集め手習指南仕り今日まで夫婦が命毛、筆先に助られ清書の直し字、毎日書共上らぬ手跡御尋れに預る程身の不器用と御勘當悔に詮方なき仕合と歎くをつら〳〵聞し召し子供に指南致すとは賤しからざる世の營み筆の冥加藝の德、申す所に僞りなくば手跡もかはらじ改めるに及ばれ共愛にて書せ道實が所存んは後にて言聞さん、認置いたる眞字と假字、詩歌を手本に寫し見よと白木の机御手づから指寄せ賜へばハアはつと先へは出ず後ずさり、志根惡の左中辨物かげよりずつと出コリヤ源藏樣子殘らずあれから立聞師匠の差圖は兎も角も辭退申て出る筈が兩手を付て目をまろくし畫の所作がらするは書ても見樣とおもふ氣かそればのぶとい、叶はぬ事、ハアお馴染とあつて忝い、希世樣のお詞に一つも違はぬ、役に立ず、併し身の分限を顧みぬ源藏めでもござりませぬ只今是にて書けとあるお手本書て能いやら惡いやら後先の樣子も存ぜず四年以來在所住居くさ、墨に三文筆書出しや反古の裏に書ならば揚打もせまい其結構な机に墨筆大鷹檀紙の位に負け、一字一點いかなくホヽよい了簡、いかぬと知てなぜ立ぬ、サアそこでござりまず、御勘當の私御意にあまへた身の願ひお取なし賴み上まするムウそれで聞へた

詫言は仕てやるが今ばならぬ、と言ふ其仔細ひつゝまんで咄して聞そふ此度、帝の仰せには存命不定の世の中生死の道には老若差別はなけれ共マア年寄から死るが順、道菅亟相は當年五十二歳、天命をしると言、齢も過ぎ寄年を惜ませ賜ひ唐まで響る菅原の一流これまで傳授の弟子もなし一代切りで絶すは殘念、手を撰んで傳授せいと勅諚で七日のものいみ事の外お取込事濟んでから願ふてやろ、ハア様子段々承はれば御大慶な勅諚サア其勅諚も大慶もしれた事は言ず共早々歸れとせり立るイヤ立な源藏言付けた手本只今書けと仰ば武部が身の大慶希世は偏執むしやくしや腹、立寄る源藏にらみ付け、わりや兄弟子に遠慮もせず書ふと思ふて出しやばるかホヽお笑ひあつても恥しからず御免なれと机にかゝり手本を取て押戴き、こころおぞせず摺る墨の色も匂ひも薫しき筆の冥加ぞ有難き希世傍へ擯寄て、わが様な横着者は手本の上をすき寫し、その手目は身がさせぬ恥と頭ばかき次第身のざまの恥つらわりや何共思はぬか、どてらの上によごれ袴、机に直つて居るざまは貧食寺の講中、奉加塲の帳付けに其まゝ、無縁法界を書なよと悪口たら〳〵言ひ散らし怪我のふうにて机を動し肘に障つて邪魔するも構はず告めず手本の詩歌心よく書終せ机も倶に御前に直し。しさつて頭を下げ居たる、亟相清書を取上げ賜ひいさごをきる草只三分ばかり、「跨樹霞纔半段餘」是は我が作れる詩きのふこそ年は暮しが春がすみ、春日の山に早立ちにけり、是は又人丸の詠歌いづれも早春の心を詠みかなへり、假字といひ眞字と言ひア是に勝れし筆や有ん、ホヽ、出來したり〳〵うえじて筆の傳授といつば永字の八法筆格の十六點名をそれ〴〵に言に及ばず、人々の知る所菅原の一流は心を傳へる神道口傳、七日も滿る今日只今神慮にも叶ひし源藏と御悦は限なしハア有難や忝い筆法御傳授有るからは御勘當も赦され前にかはらぬ御主人様、ヤア主人とは誰を主人、傳授は傳授、勘當は勘當格別の沙汰なれば不届きなる汝なれ共能書なれば捨置れず私の意趣は意趣、筆は筆の道を立つる道實が心の潔白、叡聞に達しても依枯とは思

し召れまじ希世にも疑はれな、勘當は前の如く主でなし、家來でなし、此以後對面叶はじと尖き御聲源藏が肝に燒鐵さゝるゝ心地、道理を分けての御意なれ共傳授は外へ遊ばされ勘當御免と泣詫る、コリヤ源藏が歎くが道理勘當を赦されれば傳授しても規模がない彼が願ひも希世が望も立つ樣の了簡は傳授と勘當かへ〳〵にして遣はされたら、よさそふな物の樣に存じまするといふ折から當番の諸太夫罷り出餓の御用これ有る間只今參内遊ばされよと瀧口の官人參られしと申上れば御不審顏、七日の物忌過きざる中、御用とは何事隨身仕丁の用意せよと裝束の間に入賜ふ參内と聞し召立出賜ふ御臺所、襠の下に戸涙を押隱し人目包むも餘所ながらお顏をせめて拜ませんと心づかひは希世が手前傳授の樣子承ればお前には殘り多からふ、仕合は源藏りさながら御勘當はゆりぬげな舘の出入もけふ限りかなたこなたを思ひやり、御參内を見送りがてらそれで〳〵と襠の下をしらする御目遣ひ、夫婦は重々お情けの身にしみ渡る忝け涙、束帶氣高き菅亟相一間の内より立出賜ひ神道秘文の傳授の一卷、源藏に賜はりける、當座の面目御流儀末世に傳へる寺子屋の敬ひ申奉る、因緣斯さぞしられける、サア傳授濟からは對面是まで罷り歸れ立よ〳〵と類りの御諚、コリヤ源藏吠頻かひてももふ叶はぬ、腰がぬけて得立たずば引ずり出さんと立寄る希世、のふあらけなく仕賜ふな三世の緣の切れ目じや物、立たぬも道理、歎くも道理涙ぐめて御暇乞見奉れと、かい取の妻より覗かす戸涙の顏、それぞと推し賜へ共しらず顏にて立出賜ふ、何としてかは召されたる御冠のおのづから落るを御手に請留賜ひ物にも障らず拔たるはハアはつとばかり御氣がゝり、イヤそれは源藏が願ひ叶はず落涙致す、落は落ると讀ならば其驗でかな、イヤ〳〵左にてはよもあらじ參内の後知れる事、源藏早く歸されよ冠正して參内有る、希世はこは〳〵御見送御勘當の身の悲しさは行に行かれず延上る見やり見送る御後ろ影、御簾にさへられ衝立の邪魔になるのも天罰と五体を投伏し男泣戸涙が悔は夫の百倍こなたは御前のお詞かゝり直

にお顔を見さしやつた、わしはやう〳〵御臺様の後に隠れてあんじりと お顔も拝まぬ女房の心思ひやつても下されぬ、まんがちな一人泣、同じ科でもこなたは仕合女子は罪が深いと言ごふした謂れでなぜ深いどんな女に生れしと御臺のお傍も憚りなく果し涙ぞいちらし、希世のさ〳〵立戻りハーア源蔵を帰されぬは御臺所御油斷〳〵一刻も早くぼいまくれと重れて仰付けられたが、そこを少し身が了簡、其かほりには、傳授の巻物、讀で見る望はない、筆の冥加にあやかる爲、ちよと戴してくれんかと望にぜひなく懐ろより取出すを引つたくり逸足出して逃行をどつこいやらぬと源蔵がぼつかけぼつ詰、襟がみ掴み引ずり戻して、かつぎ投げ大の男に一泡ふかせ傳授の一巻取返し是をおのれが引かけふで直垂の羽繕ひ、青鷺のこつ頂め、びく共せば打ち殺すと刀四五寸拔かくる、コリヤ源蔵聊示すな戸涙あやまちさするなとお詞かゝればエーエ〜儕エ〜儕なな、只助るも殘念な寺子屋が折檻の机ばこいつが責道具女房奏へと取より早く脊中に机大げなし兩手を引ばり机の足裝束の紐引つしごきがんぢがらみにくゝり付け盜みひろいだ師匠の躾、しつぺいの代り扇の親骨頬に見せしめ、ひりつかせんと打立〳〵突飛せば、いたさも無念の命のかはり、恥を脊負ふて帰りける、源蔵夫婦手をつかへ禁裏の様子承はり帰り度く存ずれ共長居は恐れ、御臺様此上ながら夫婦が事お捨なされて下さりますなヲゝそれは心得たが今行といふを聞捨にせめて一夜と言れもせぬ命が物種、縁も盡ずば又逢ふ、もふいきやるかアイ〳〵参りませればなりませぬでござりますと、戸涙が涙長汐にかはく間もなき袖の海、見る目いぢらし夫婦が姿泣々御門を。

（床本）築地の段

出て行く源蔵と引違へ帰る梅王青息吐息門の臺木に足つまづきかつばこけて起る間も待たれぬ〳〵侍衆御大事がおこつて來た科の様子は何かはしらず使の廳の官人共亟相様を取廻し金棒割竹アレ〳〵爰へ御臺様へ此様子をと舘の驟動門外には鐵棒打ふり警固の役人轟にも召せ奉らず菅丞相の前後をかこみ先にすゝむは時平が方人三普の清貫門外に立はだかり齊世親王かり屋姫加茂堤より行方

築地の段

豊竹鶴澤　竹本清二太郎　和泉芳鏡太夫　太夫之助

人形

舎人梅王丸　吉田玉松
菅相亟　吉田榮三
三好清貫　吉田榮三郎
荒島主税　吉田玉德
御臺所　吉田小兵吉
武部源藏　吉田玉治郎
女房戸浪　桐竹紋十郎
菅秀才　吉田文枝

知れず仔細御詮議なされし所親王を位につけ娘を后に立んとする菅丞相がかれての工み其罪遠嶋に相極り流罪の場所は追ての沙汰それまでは押込置き出口〳〵に大貫鎧門の警固は身が家來荒嶋主税を付け置くと呼はる聲を聞つらさ、御臺は警固の人目もはばちず走り寄て道眞公コハそもいかなる御事そや物忌みのあいだの事と姫が身の上御存じない言譯はなぜなされぬ科もない身をさすらへとの仰せは聞こえぬ恨めしやと歎きたまへばハアおろか〳〵道眞虚命蒙れ共君を恨み奉らず漸く齡かたむさし臣が拙き筆跡まで情よせ賜ふ傳授の勅諚、きのふまでは叡慮にかないけふは逆鱗蒙る共みな天命のなす所先程冠の落たるは殿上の札をけずられ無位無官の身となるしらせ今更悔むはおろか〳〵これより配所へ行にもあらず見苦し〳〵なげかれなと御臺を遠ざけたまいける希世は道より取てかへし清貫殿御苦勞千萬此わろの樣子うけたまはり、弟子の方から師匠をあげ向後頼むは時平公、菅丞相と一つでない、取なし宜しく頼み入、氣遣ひあられな呑こんだ作法の通り菅丞相内へ追込み門をうて、かしこまつたと荒嶋主税割竹振上げ立かゝる、コレまつた其後目希世がかはつて仕ると割竹うけ取りコレ謀叛人殿今までとはあたりが違ふ、時平公へ宗旨をかへた手見せのはたらき割竹一つと振上れば血氣の梅王ずつと寄り希世を四五間突飛すヤア下主の處外者自滅仕たふて出しやばつた

なハレヤレしれてある下主呼ばり。こなたの口から慮外とは膓もよれかへるハ〜〜其劇竹ふり上げて誰を〳〵ムーチーサ謀叛人の此わちよをヤア謀叛とは誰を謀叛、御恩を忘れし人非人菅丞相にはおかまいなくと儕に罰は身があてると又飛かゝる梅王丸御手をさしのべ引寄せ賜ひヤア小ざかしい汝が振まひ勅諚によつて斯なる道眞希世は扨置其外へも手向ひするは上への恐れ汝はもちろん舘の者共我詞を用ひずば七生までの勘當ぞと聞て希世がこはげも拔けコリヤ梅王して見ぬかい〳〵ほうげたばかりの腕なしめとのさばるむれんこらへろ梅王是非も情も荒嶋主税官人共に追立られすご〳〵舘に入賜ふ御有様こそはいたはしきサア〳〵用意の大貫鎚表と裏へ手分の人數築地の穴門樋の口まで暫時の間に打付しは物いまはしく見へにけり、情貫見まはしハレよい氣味出口〳〵のしまりも能か築地の屋根を越なも知れぬ主税萬たんゆだんすなくれに及べば希世殿いざ歸らんと打連れて六七間も打過る築地のかげに待居たる武部源藏ぬつと出希世を一とあて悶絶させあはてる清貫相伴投げスハ狼藉者打のめせ殺せんくれとひしめいたり武部は戸浜に指添渡し寄らば切ん勢ひなり、希世は漸やう人心地立上つてヤアうぬは源藏め一度ならず二度ならずひどいめに合したなうぬがする狼藉、菅丞相もさしたになつて流罪の仕置が死罪になると言はせも果す高笑ひ、ハ〜〜女房に聞け物おぼへのない拔作どの傳授はうけでも勘當ゆりぬ此源藏には主人がない梅王は主持ちでおのれめをさいなまずこらへてゐるかはいさに名代に投げてこました名代次手に皆なで切と女房諸共拔はなしめつたなぐりの太刀風に小糠侍おがくず公家ふき立られてちりうせけり敵なければ立歸り時せつも幸たそがれどき門の扉をとん〳〵〳〵たゝけば内よりとがめる聲聞きおぼへた梅王かさいふは武部源藏殿かヤア殿所かい若い者、ゆだんしてゐる所でない屍の釘付ふみやぶり御主人達の御供物此場を退は安けれどもこと が今も聞く通り仁義をまもる道眞公と有て讒者がはからいにてお家の斷絶おぼつかなし御幼少の御若君夫婦が預り奉らん、所存を立るはコレ梅王若君をこつそりと築地

杖折檻の段

役毎日替り
豊竹つばめ太夫
豊竹澤仙太夫
豊竹澤呂太夫
鶴澤叶太夫
豊竹澤本相生太夫
豊竹澤廣助

の上からムーヽヽ出來た〳〵源蔵殿お上へいふては得心あるまい盗出すがお家の爲、そふじや〳〵よい了簡一刻一歩も早退たし頼む〳〵といふ間もなく築地の上から梅王が心の早ざきかつ色見せたる花の顔ばせ大事の若君怪我さしますまい心得高き築地の屋根のび上つてもどゞかぬ脊丈とやせん戸浪をだき上れば軒に手とゞく心もとゞく若君請け取り抱おろし外と内とに忠臣二人、むねばひらけどひらかぬ御門、荒嶋主税目ばやく見付ヤア盗人の隙はあれど守人のひまがない脊覗きめを手引する内と外との相ずりめら、菅秀才を盗んだこのむねたつしん此旨注進せんと馳出す先に源藏が立ふさがつてどこへ〳〵儕をやつてよいものかと討てかゝれば抜合せ切結び切ほどき追つかへしつ二人が勝負屋根の上から見てゐる梅王棧敷正面眞向二ツわれて命ば荒嶋主税とゞめに及ばぬ切捨〳〵あやうい場所を盗人夫婦行末榮ゆる菅秀才若君たのむ夫婦の衆、舘の父君母君を頼むぞ梅王心得たと互に頼みたのまるゝ忠義〳〵をかき傳ゆる筆の傳授は寺子屋が一藝一能名も高き人の手本となりにけり。

人形

立田前　桐竹政龜
苅屋姫　桐竹紋太郎
宿彌太郎　吉田玉松
土師兵衛　桐竹門造
伯母覺壽　吉田文五郎

（床本）杖折監の段

菅亟相の御別れ對面ありたき覺壽の願ひ流人預る判官代輝國の用捨を以て河内の屋敷へ入り賜へば老の悦び大かたならず馳走の役人夜費のわかちもしらぬいそがしさ立田の前は船場にて思はず逢たる苅屋姫、密に伴

ひ歸れども家來も多くはしらぬがち隱し置たる小座敷の襖をそつと押開きさぞ淋しからう精もつけふ、顏見に來たいは山々なれど、去りとては何やかや用事の多き母樣の傍放されれば得參らぬ、今が能透、誰も來ぬ氣晴しさにサア爰へと、心づかひもはらからの姉の情けを苅屋姫、一間を去る目は涙、齋世樣に別れてより段々お世話に預る上父上樣にもお目にかゝりせめて不孝の申譯、それも叶はぬ物ならばと我身の覺悟極めても產の母樣覺壽樣今の母樣都の弟親王樣の御事は猶しも忘れぬ得忘れぬ、心を推量してたべと歎けば俱に涙ぐみ悲しいは道理〳〵さりながら相亟樣に逢ぬとて短氣な事などかんまへて思ひ出してもくださんすな、母樣のお願ひ立つて此屋敷に御逗留ごふぞ首尾を見つくろひ母樣のお耳へ入れお差圖請けてと餘所ながら口むしりかけて見たればな、こちの思ふた坪へはいらず母樣のかたくろしさ、お果なされた郡領樣に少しもかはらぬ行儀作法我が產だ子だも人にやれば、先きこそ親なれこちは他人それを親じやの娘じやと思ふは町人百姓の譯をばしらぬ子にあまさと、幸先惡い訴訟もならず外の事に言紛らし其場は濟でも始終が濟ぬ、お宿申すもけふで三日時氣空も吹き晴て下り日和に直つたと船場から注進故今宵八ツがお立とて輝國殿の旅宿よりしらせによつてお立の用意、今やなんぞと思ひの外手詰になつたがどふしてよからふ膝共談合コレ泣かずとよい智慮出して下さんせと、とつ置つの胸算用後にすつくと宿彌太郎よい分別者是に有ヤア太郎樣いつの間にゝ〜いつの間にとはコレ立田連添男の目をぬいてこつそりと取込で大それた身の上咄し苅屋姫はそなたが妹藥の上から養子の仔細しつては居れど京と河內、武家と公家とは位、格別嘗相亟の伯母風吹かし算めかしてもいつかなめかれぬ位負名斗り聞て逢たは今てんと御器量、齋世とやら樣とやらが現樣にならしやつたも道理じや〳〵姫の顏見ぬ先はおれが女房は揚貴妃じやと思ふたが、くらべて見れば無揚貴妃そなたの名もかへればならぬ、ソリヤ又何とへハテ知れたお次の前エ、ずは〳〵と出放題母樣へも隱して居る。此譯何

共言しやんすなそれは氣づかひ仕賜ふべからず明日のお立しらされし輝國の旅宿へ參り此間御逗留心づかひの一禮申いよ〳〵刻限相違なく一番鳥の鳴のが相圖申合せに往てこいと覺壽の言付只今參る道でよい思案が出たらコレ戻つて言お次の前アレまだじやら〳〵轉業口チツト閉口いてこふと表の方へ出て行、後を見やつて苅屋姫、あなたがおまへのお連合身の上の事に取紛れ御挨拶も得申さぬ、アヽ是挨拶はいつでもなる事こちの願は延されぬアヽどふがなと案じ煩ひチヽそれ〳〵所詮母様にいふたとて埒の明ぬは知れて有る連合も留主母様もお傍にござらぬ折からなればお前を私が連ていて呵られふがどふならふが後はまゝいなサアこなたへと姫の手を取るうしろより不孝者ごつちへ行と禊ぐはらりと母の覺壽、杖ふり上て飛かゝるを立田は、はつと抱き留めお前に明て言なんだ隱したお腹が立ならば此立田、打も擲きもなされませ此中ものたまはぬか人にやれば我子でないとおつしやつての折檻は母様共覺ませぬ、相丞様の御秘藏姫、杖棒あてゝよいものかナア自を〳〵と姫にかばつて身をいとはずイヤお前に科はない不孝な自打賜へと、立田を押やる杖の下いや〳〵お前は打されぬイヤこな様はと折檻の杖をあらそふおとゝい思ひ老母は猶もいかりの顔色、コリヤ立田おりや他人には折檻せぬ餐子にやつた相丞殿はおれが爲には甥の殿子にやつたは姫は甥孫、親も赦さぬ徒して大事の〳〵甥の殿流され賜ふは誰が業憎ふて〳〵コレ此杖折る程擲かれば相丞殿に言譯立ぬ六十に餘つて白髮天窓、連合に別れた時剃をそらさぬ立田の前尼になつては便がない力がないと留られて法名ばかり覺壽と呼ばれ邪魔に思ふた此白髮けふと言けふ役に立田、天窓を剃つて衣を着れば打擲の杖は持たれぬはい、傍杖望む立田からと走り寄つて丁〳〵打るゝ姉妹打母も俱に涙の荒折檻アヽこれ〳〵伯母御前卒爾の折檻仕賜ふな齋世の君の御不便有る娘に疵ばし付賜ふな父を床しと慕くる苅屋姫に對面せん、是へ伴ひ賜れと障子の内より相丞の御聲高く聞ゆるにぞ老母は杖をがらりと投げ捨、わつと叫んで伏轉び暫しこたへもなかり

しが産の親の打擲は養ひ親へ立る義理養ひ親の慈悲心は産の親へ立る義理、あまき詞も打擲も子に迷ふたる親心、逢てやるとは姫よりも母が悦び、詞には言盡されぬ結構な親持た持た〳〵と目に持た涙の限り聲限り二人の娘は何事もお慈悲〳〵と斗にて泣よりほかの事ぞなきコレのふ爰から禮をいはふより、こいと有ばいざ傍へと、隔の襖押し明くれば背相丞は見へ賜はず、逗留中作られし主の姿の本像斗コハそもいかにと苅屋姫逢てやらふと宣ひしは母さまの折檻をとゞめん爲、とにかく不孝な自故お逢なされて下されぬか今物をおつしやつたは父上に違ひはないに、木で作りし父上樣が但しは物を宣ひしか又は何處ぞへ隱れてかと立て見居て見うろ〳〵のふさはがしや苅屋姫、相丞の逗留中御馳走申は奥座敷爰へ餘程間數も隔たり先程聲かゝつた時爰へはどふしてござつたと思ひながら嬉しさにわきまへなく見れば此木像計り次手ながら苅屋姫咄して聞さふ、逗留の中に主の像畫てなりとも作つて成と伯母が筐に下されと願ふた日から取かゝり、初手に出來たは打わり捨二度目に作り立られしを同じく是も打碎き三度目に此木像作り上て、おつしやるには前の二つは形ばかり、勢魂もなき木聖人是は又相丞が魂殘す筐とて下されし主の姿、ものを言まいとも言れず帝への恐れ有ば逢たふても逢れぬ親子、木とな思ひそ苅屋姫ものおつしやつた父上に逢つて嘸嬉しかろ母も本望とげましたと親子三人悦びの中へのさ〳〵立歸る太郎が爺親土師の兵衛、覺禱これにおはするか、おお客人のお立も明朝出立のこしらへ嘸取込、役に立たずとお見まひ申手傳ひでも仕らふと參りがけに輝國殿の旅宿へもちよと付け届け伴が幸ひおり合はせ、用意も大かた出來たと聞く先は大慶、とかうする内もふ暮相一先づ歸つてお立の時分又參るのも老足なればお邪魔ながら是におろ、心づかひなし下されな、兵衛殿の義理〳〵しい嫁子の所は内同然、斷に及ぶ事か用が有ば遠慮なくおつしやつたがよいわいの、刻限まではコレ立田そなたの部屋にお寢間をとりや後程お目にかゝらんと姫を連立入賜へば後は親子が小聲になりコリヤ道

〳〵しめし合した通り太郎ぬかるな氣遣ひなさるな親人と奥と部屋と〳〵別れ行。座敷〳〵は燭臺照し今宵限りの御奔走とり〴〵騒く。

（床本）東天紅の段

東天紅の段

竹本文字太夫
野澤勝平

人形

土師兵衛　桐竹門造
宿彌太郎　吉田玉松
立田の前　桐竹政龜

斗りなり土師の兵衛は一間よりそつとぬけ出前栽の勝手覺へし切戸口、錠捻じ切つて押ひらけば、外から相圖の挾函さし出す仲間徒若黨コリヤやい言付た人數の裝束、丞相を迎ひのはり輿、スハといふ時間に合はせと、家來共先へ歸し挾箱引だかへ、月かけもるゝ米の間〳〵うそ〳〵窺ふ同腹中、親人お首尾は、件のものは參りしか、伴氣づかひ仕るなコリヤ此中に計略の彼一物大事の談合爰へ〳〵と大庭の池のほとりで囃く親子、宵からそぶりに氣をつけて、宿彌太郎に目ばなしせず、立田の前がものかげより聞共しらず宿彌太郎、先ほどお聞きなさるゝ通り判官代輝國迎ひに參るは八つの上刻時平公よりお賴みの、菅相丞殺す工面、蠱もの仕立むかひと偽り、請取つて途中でぐつ、とはいふものゝ一デ鷄がうたはれば姑の片意地名殘りおしんで渡されまい、八つ鷄の啼かぬ先に宵啼する鷄、是に有りと挾函より取り出し、ホー皮膚のよい白相國とかふする内、もふ夜半、一調子はり上げ存分にうたふてくれ、一聲聞かれば落付かぬ、親人なぜ鳴ませぬのイヤ其分では鳴ぬ筈宵鳴は天然自然極めては鳴かぬもの、それを鳴かすが秘密事、大竹の中へ熱湯を入れ其

上にとまらすれば、陽氣の迫るを時節と心得、時をつくろ、とまり竹も挾箱に入て來た、蠶子の湯もたぎつて有る、釜ぐちそつと取てこい、おゝ取て來るは安い事、湯を仕かけても鳴ぬ時はハテくど〳〵、鳴かぬときは又分別と、親子が工み、なむ三寶、一大事、先へ廻つて母樣へおしらせ申て、イヤそふしてはイヤ、いはいでは又こちらが、いふてはあちらがこちらがと、心迷ひし胸なでおろし、宿彌樣、太郎樣は何所にと、尋る聲にはつと二人がはいもうけでん、鷄隱す挾箱あたふたしめて、さあらぬ風情、ヤアこと〳〵しう呼立つるは何ぞ、急な用でも有るか、さもない事なら不遠慮千萬、親人もこの宿彌も肝にこたへて惚りしたといふ顏つれ〴〵打ながめ、おまへ方の惚りより、わしに惚りさゝしやんした、聞へぬ連合舅君、癪むかひをこしらへて、菅相亟樣殺さふとはあなたに何ぞ恨が有か但しは時平に賴まれし慾には馴染の女房も捨、母樣の義理も思はずか、おまへは捨る心でも、わしや得捨ぬ太郎樣、コレ申し、親父樣思ひとまつて下さりませと、舅を拜み夫を拜み、聲も得立てぬ貞女の思ひ涙、操を現せり。兵衞は宿彌に目くばせし、イヤハヤ眞身の異見にあふて親もせがれも面目ない、向後心をあらためる、嫁女此事聞流しに、アゝ勿体ない聞き流さいでよいものか、御得心とあるからは、此世ばかりか未來までかばらぬ夫婦舅君、まだ如月の餘寒もはげし炬燵に膚温め酒一つ上げたい、サアお出と、先に立田がそれそこを、心得太郎が後げさ、肩さき四五寸切られながら、振返つてつかみ付きヱゝこれ人でなし卑怯者、一人の手にもたらぬ者、だまし殺しが本望か、女の義理を立てすごし悔しや無念とのゝしる聲、おとほれ立てなと宿彌が下着褄さき口へ押し込みれぢふせ肝先ぐつと一抉り、兵衞は前後に心を配り、伴息は絶たか、氣づかひめすな只今とゞめ、扨死骸は間に及ばぬ此大池、体を浮さぬ手ごろの石、袂や帶にくゝりそへ、深みへやれと二人して投込む死骸はくれなゐの、血汐に染る池までも立田が、名をや流すらん、コレ親人是はこれでも濟ぬは、鷄蠶子の湯を取て參らふ太郎そ

相亟名殘りの段

役毎日替り

鶴豊竹　古觀太夫
澤竹野　清六
澤本澤本　土佐太夫
綱津吉　兵衛
太　造夫

人形

菅相亟　吉田榮三
伯母覺壽　吉田文五郎
宿彌太郎　吉田玉松
饗迎い　吉田玉市
奴宅内　吉田玉德
苅屋姫　桐竹紋太郎
判官代輝國　吉田玉幸
土師兵衛　桐竹門造
水奴　吉田利男
水奴　吉田玉男

れにはもふ及ばぬ、鳴す仕樣は身共に任せと武士のたしなむ懷中松明手ばしかくともし立、池の中へあかりを見せ、挾國のふた仰向鷄を上にのせ、浮める池の水の面、刀の鐺さし延す腕一ばいに押やれば動ぬ水も夜嵐に立つや小涙のうねりにつれ半端ばかりながれ行、親人何をなさるゝ事、挾箱の蓋を船にして子供のする業おとなげないあれが何の役に立つゝ〳〵譯をしらずばいふて聞けふ、惣別淵川へ沈んで知れぬ死骸は鷄を船にのせて、尋れば其死骸の有る所で時を作る鷄の一德思ひ出し、池へしづめた立田が死骸、今一役に立てゝ見るうまい手つがひ、拍子まんが直つてきた。あれ〳〵太郎こそ鳴たは東天紅アリヤまたらたふばとんてんかう、八つにもならぬ胥啼の聲さへかへる春の夜や庭木のれぐらに羽たゝきして一鷄鳴けば萬鷄うたふ、國谷闘の闘の戸もひらく心地に親子が悦び、これから急ぐは菅相亟むかひのこしらへ氣がせくと、兵衛は出て行く、切戸口、宿彌太郎はたくみの仕殘し。

（床本）

相亟名殘りの段

聞して入にげり。早刻限ぞとお膳のこしらへ。銚子かはらけ熨斗昆布。腰元共に鳴臺持たせ。伯母御、座敷へ出給ひ。百日千夜留たり共別るゝ時はかはらぬつらさ。此上頼は御免の勅諚歸落を松の嶋臺。行末祝ふ熨子昆布菅相亟も此間心づかいの

御一禮。互に盡ぬ御名殘宿彌太郎在り出、御立の刻限迚早門前迄迎の官人判官代輝國は路次の用心辻固只今旅宿を立申され輿舁の官人に譜代の家來を相添られ只今是へ參上と怪の輿舁入て時刻移ると せり立る營相亟は悠と〳〵大廣間より出させ給ひ輿に召迄見送る老女人前作つてにこ〳〵と泣ぬ別ぞ哀なる。宿彌太郎も御見立門送りして立歸りヤレ嬉しや仕廻が付か覺壽樣も御氣休め寢間へござつてイヤ寢たふても寢られぬはいの寢られぬとは氣色でもアレまだいの客を立て嬉しいと一道な聟殿の悅び一つ屋敷に居ながらの暇乞も得せいでの苅屋姫が悲しかろ人の逢のもけなりかろと、かけかまはぬ立田さへそれで態と呼出さなんだが機嫌よふ立しやつたを悅びにはなぜこぬぞ誰ぞゐて見てこいと云にきよろつく宿彌太郎腰元は立戻り奥にござるば苅屋姫只お一人立田樣はござりませぬ何じやいぬ内を放れてどこへいきやろ今一度見てこい座敷の隅々かぐれ〳〵。尋々と吟味のきびしさ。提灯手でに若黨仲間幾人あつても行屆かぬ花壇築山手分して尋る奥の池の端芝に溜つた生血を見付コリヤ〳〵此血の流込池をさがせと。聞に水心得た奴共飛込〳〵水底よりかづき上たる立田が死骸驚騒ぐ家内の騒動太郎は鼻も動さず殺したやつは内にある全議濟迄門打て家來共動すなとわめきちらせば母覺壽姫もかしこへ轉び出コハ誰人の仕業ぞや先からお顏を見なんだは伯母樣のお傍にと思ひもうけぬ此死骸父上には生別れお前には死別時もかわらず日もかわらず悲しさつらさ一時にかゝる例もある事かと老母に取付き悔泣きヲ、道理〳〵そなたはおれが傍にと思ひおれば、そなたが傍に居ると思ひ違が娘が不運母が因果でおじやるはいと、かつぱと伏て正体なし太郎傍へ立寄て涙が死人の爲にはならぬ女房共への追善には殺したやつをひつぱり切是にて詮議仕らんと椽端に大あぐら男女に限らず家來のやつばら片端から詮議するマアとつ付に居る宅内身が前へ出おろうナイ〳〵ないと御前にかつくばい人は知らず拙者めにおうたがひは御ざない筈お死骸を取上げた御ほうびを下されうで一番にお呼出し忝ない義でごはり

まするでごはりますヤアまが〳〵しい褒美とは横着者め立田が死骸池にあるを、おのれはどうして知おつた夫かせイヤあのしりも、あたまも見樣等はごはりませぬ池の深みへ芝から傳ふた血を證據にヤアぬかすな提燈の火明りで夫がそれと知る物かうぬが殺してしづめた池外の者がどうしてしろう血の分では云譯は立ぬ是はお旦那無理おつしやる云譯立ふと立まいが池が血へ流込だ其外は存じませぬヤア池が血へ流たとは血まよふて何ほざくきやつ詮議場で水くらはせ白狀さする夫引立と宿彌もつゞいて立所を老母押留イヤ責るに及ぬ詞のてん〳〵嬉しや娘の敵が知れたハア責なとは適お目高科極つた罪人女共へ手向ろ成敗大げさに打放す腕を左右へ引ばれと刀提立寄宿彌イヤ成敗は當の科けさに切ては只一思ひ苦痛させれば腹が居ぬ娘の敵助太刀は此母後は犀殿刀を借とかい〳〵敷も褄引上向ふ目當は奴にあらず油斷太郎が弓手の、あばら突込刀に宅内は、命拾ふて逃て行宿彌太郎は急所をさゝれもがき苦しむ息の下身共に何の科あつて毫めがと、いはせも果ず覺へないとは云さぬ〳〵我科を人に塗成敗をして見せ立裾ばせ折つた下着の褄先切てある其切はコリヤ立田が口に聲立させぬ無理殺し齒をかみしめ放さぬ褄先切つた事は打忘れ儕が科を儕があらはす極重惡人死骸の前で敵を取母が娘へ手向の刀きも先へこたへたかと大の男を仕留る老女遣に河内郡領の武藝のかたみ殘されし後室とこそしられけれやゝ時移れば判官輝國只今是へ御出と家來が申に老母は驚き相丞は先程お立誰を迎に心得ぬ事ながら此方へ通しませい畑屋姫は奥へ行きやこいつはまちつと苦痛をさすと刀を其儘死骸押退出迎へば輝國も早入來りお迎の刻限御用意よくば早お立と申詞の先折て輝國殿何おつしやる相丞の迎にはそこの家來が先程見へ請取つて歸られたはもふ一時も先の事ヤアこれ〳〵伯母御身が家來に渡したとは旁々持て心得ず鷄の聲に刻限はかり只今鳴た旅宿の鷄八つに參る迎の約束家來と云ふが直に身共が參つたとて刻限も來らず鷄も鳴ぬ先渡したいふては濟まぬ船がゝりの其間伯母御に逢すは武輝國が情の用捨

今日の今に成つて名殘も一倍島へはやらぬ渡したいへばそれで濟と鼻の先の女子の了簡菅相丞の、あだにこそなれ爲にはならぬイヤサ コレ僞なな申されなイヽヤ 僞は申さぬ庭で鳴た鳥の聲そこへござつた迎の衆渡したに違ばないが請取らぬとおつしやるので娘が最後智めがあのざま思ひ合せばさつきにきたは饗迎コレ伯母御内の騷動死人のある上饗迎嘘ではあるまゐざん者共のしはざであらふ一時違へば三里の後ぼつ付て取返さんとせきにせいてかけ出す輝國ヤアヽヽ判官先待れよ 菅相丞は是にありと一間より出給ふ覺壽はびつくり。さつきに別れた菅相丞そこにはどうしてヽヽと不審の立も道理なり判官輝國打笑ひぬけヽヽとした伯母御の僞暫時の仰天相丞是にましましませば輝國が安堵ヽヽ見へ渡つた此御難儀譯も聞きたし力に成つてしんぜたけれど 私ならぬ警固の役目早刻限も移ぬればいざ御立とすゝむる所に先程見へた警固の役人たつた今門前迄何じや警固がハテよい所へ戻られた嘘つかぬ覺壽が證據是へ通し輝國殿へ見せませうイヤ身が名をかたつた饗役人直に逢ては惡かるべし忍んで樣子をうかゞはんと相丞諸共一間の障子引立内に隱れ居る奥に先立警固が大聲コレ老母輝國の名代とけあなずり。とでもない物身共に渡しようぬつけりとさゝれたの、是はめいわく菅相丞を請取ながらとでもないとは何おつしやるアレまだぬつけり相丞は相丞でも木で作つたはこつちにいらぬ肉附きの菅相丞替る氣で持つて來た木像コリヤ此奥にといふに覺壽も心付エヽ 忝ない扨は 魂を込られし木像であつたかい猶も證據を見屆んと心の悦び押かくしこなたの云分合點がいかぬ其木像見せさつしやれチヽしやちこばつた荒木作りサア今見せしと明る戸の奥に召たは木像ならぬ優美の姿菅相丞につと笑ふて立出給へば警固はぎよつと呆顏覺壽も違ひし心當障子の内と今見る姿 心どきまきうたがひながらアヽよふ戻して下さつたたしかに伯母が請取ましたヤアどこへヽそりやならぬと云物の連て歸つて見たのは木像すりかへられたと氣が付てかへに戻つた處ではほんの菅相丞おれが目の惡いのか見所に

よつて替るかいイヤ替らふが替るまいが戻された背相亟いざこなたへと立寄覺壽ヤアのぶさいと突飛し相亟を又輿に乘戸を引立て家來に向ひわいらも樣子を見ろ通いかにしても、あやしい事共此分では歸られず念の爲家搜しすると踏込先に宿彌太郎半死半生のた打苦しみなむ三寶太郎樣が切れてござる旦那〳〵と呼聲に警固の中から親兵衛前後もさらに、わきまへず走寄つて引起しコリヤ伴此深手はどいつが所爲相手を知せと氣をせいたりノウ兵衛殿相手は姑ア〻わしが手にかけたヤア鉾を手にかけ落付自慢何科あつて身が伴をヤアとぼけさしやんな姫殿そいつが立田を殺した時こなたも手傳ひしやろがの娘の敵切つたが何と嬰迎の棟梁殿何もかも現れ時さつぱりと云たく〳〵エ〻殘念〳〵伴めが出世を思ひ時平公に一味して菅相亟を殺さん爲鷄に宵鳴きさせ十が九つ仕おゝせた兵衛が方便腐婆めにかぎ出され殺された伴が敵覺悟ひろげと飛かくるをヤアさはさせじと判官輝國こかげよりあらはれ出覺壽を圍てつい立たりヤアどなたが出てもびく共せぬ兵衛が工の破れかぶれ死物狂ひの働見よと切つてかゝればかいくぐり持つたる刀踏落し利腕摑んでひつくり返し足下に踏付大音上ヤア輝國が家來共饗者めら為片端からくゝれ〳〵と云聲に始のきせいぬけ〳〵に一人も殘らず逃失たり覺壽はとつかは輿の戸の明る間嘸やお氣詰りと内を見ればこはいかに、僅の木像又惚り是はいかにと立歸りこなたの障子押開れば伯母御驅がせ給ふなと菅相亟の御詞爰でも惚りかしこでも惚り惚りに心の迷ひどちらがどうじや輝國殿目利なされて下されと問る〻人も問人も呆れ果たる斗りなり相亟重て輝國の迎遲參故睡共なく暫時の間物騷がしく聞へし故うかゞひ見れば兵衛が工太郎が所爲立田の前は〻かなき最後ぜひもなし伯母御の心底さこそ〳〵某是へ來らずばかゝる歎もあるまじと今更悔の御涙イヤ娘が命百人にもかえがたき大事の御身けがあやまちのなかつたを悅びこそすれ何の泣何んの〳〵といふ目に涙のふ輝國殿惡事の元は其兵衛此世のひまを早ふ〳〵太郎も供にと立寄つてもとゞり引上相亟の警固のあり樣儕

親子に見せたが本望娘が恨も晴つらんと刀を拔けば息たへたりヱヽ憎いながらも不便な死ざま。うゐ轉變の世のならひ娘が最後も此刀鞘が最後も此刀母が罪業消滅の白髮も同じく此刀と取直す手にもとゞり拂ひ初孫を見る迄とはたばい過した恥白髮孫は得見ゐで憂目を見る娘がぼだい逆緣なから弔ふ此尼種々因緣兩求佛道南無阿彌陀佛と唱れば菅相亟も唱名の聲も涙に回向あり判官輝國大きに感じ伯母御前に先取れ後にさがつた儕が成敗强慾非道の皺頭と水もたまらず打落す覺壽は木像抱かゝへ菅相亟の右手の方御座を並べて直し置兵衛親子が工もあらはれ何もかも納りし此木像の不思議な働きかゝる例もある事かやいやとよ最前も云如く匹夫〳〵が工もあらはれ我急難を逃れしも暫時の睡眠前後を知ず木に彫筆に畫例は本朝名高き繪師臣勢の金岡が書たる鷹は夜な〳〵出て萩の戸の萩を喰唐士にも名畫の譽吳道子が墨繪の雲龍雨を降せし例もあり又神の尊像木佛などの人の命にかはらせ給ふ例はかぞへつくされづ菅相亟が三度迄作直せし物なれば木にも魂備はつて我を助し物やらんざんじやの爲に罪せられ身は荒磯の島守と朽果る後の世迄筐をおぼし召されよと仰は荒木の天神河内の土師村道明寺に殘る威德そなり難き輝國四方を打眺め思はざる義にひまを取夜も明はなれ候へば御立ぞふと申にぞ又改る暇乞伯母が寸志の餞別せん用意の物こなたへと畑屋姫の上着の小袖かけたる伏籠諸共に御傍近く取直させ涙屈荒き楫枕餘寒をしのがせ申さん爲伯母が心をだきしめた小袖を島迄召さるゝ樣に輝國の御世話ながら賴まするとありければ是は宜敷進ぜ物笘の香防ぐとめ木の小袖家來に持せ參らんと立寄伏籠に手をかくる相亟暫しと止め給ひ御恩を厚く込給ふ伏籠にかけし此小袖中なる香はきかれ共名は大方伏屋の畑屋伯母御前より道實が申請し女子の小袖我身にはあはぬ笘身巾もせばき罪人が此儘にお預け申す我子袖と思召立田の前が追善の佛事も供にと伯母御前の心をさとる御詞骨身にこたへ忍び兼思はづわつと聲立て歎に扱はと輝國も心をかんじしほれ入覺壽の心は伏籠の内泣たは結句あの子が爲別れに一寸只

車塲の段

松王丸　竹本津太夫
梅王丸　豊竹古靱太夫
櫻丸　竹本土佐太夫
杉王丸　豊竹つばめ太夫
　　（豊竹呂太夫
　　竹本相生太夫）
時平　竹本大隅太夫
　　鶴澤友次郎

一目伯母が願ひを叶へてと立寄袖を引とどめ御年故の空耳か今鳴たは、たしかに鶏あの聲は子鳥の音子鳥が鳴ば親鳥も鳴は生有ならひぞと心の歎きを隱し寄り鳴ばこそ別れを急げ鳥の音の聞へぬ里のあかつきもかなと詠じ捨名殘はつきずおいさまと立出給ふ御詠歌より此里に鶏なく羽たゝきもせぬ世の中や伏籠の中をもれ出る姫の思ひは羽ぬけ鳥前後左右をかこまれて父はもとより籠の鳥雲井のむかし忍ばるゝさすらへの身の御なげき夜は明ぬれぞ心の闇路てらすは法の御ちかひ道あきらけき寺の名も道明寺とて今も猶榮へましす御神の生るが如き御すがた處に殘れる物語つきぬ思ひにせきかれる涙の玉の木元樹珠數のかづ〳〵くりかへしなげきの聲に只一目見返り給ふ御顏ばせ是ぞ此世の別とはしらで別るゝ別れなり。

人形

舍人梅王丸　吉田玉松
舍人櫻丸　桐竹紋十郎
杉王丸　吉田文作
舍人松王丸　吉田榮三
藤原時平　桐竹門造
仕丁大ぜい

（床本）車先の段

鳥の子の巣にはなれ魚陸に上るとは涙人の身の喩へ種、菅相亟の舍人梅王丸、主君流罪なされてより都の事共取賭、ひ御臺のお行衛尋れんと笠ふかゝと深綠土手の並木に差しかゝれば、向ふからも深編笠、我に違はぬ其出立、互ひにそれぞと近く寄梅王丸か、コレハ〳〵櫻丸、ヤアそちに逢たかつた、マア咄す事聞く事有りと、兄弟こかげに笠傾け、扨先問其方は日外加茂堤より宮姫君の御

後したひ尋ね行きしと、内寶八重のものがたり、何とお二方に尋ね逢たか、成程道にて追付奉り菅相亟御流罪と聞より對面なさしめ奉らんと安居の岸まで御供せしに、御對面かなはず、輝國殿の計ひにて、御歸落願ひの妨げとお二方の御縁も切られ姫君は土師の里伯母君の方へ御出、齋世の宮樣は法皇の御所へ供奉し奉り事治りしといひながら、納らぬは我身の上、冥加に叶ひお車を引く其有難い事打わすれ、賤しい身にて戀の取持、終には御身の怨となり、宮御謀叛と讒言の種拵へ御恩請たる菅相亟樣流罪にならせ賜ひしも、皆此櫻丸がなす業と思へば胸もはり裂如くけふや切腹、あすや命を捨てふかと思ひ詰はつめたれど、佐太におはする一人の親人、今年七十の賀を祝ひ兄弟三人嫁三人並べて見ると當春より悦び勇おはするに、我一人缺るならば不忠の上に不孝の罪、せめて御祝儀祝ふた上と詮なき命けふまでもながらへる面目なき推量有れ櫻王と拳をにぎり齒をくひしめ、先非を悔たる其有樣、櫻王ひ理りと暫し詞もなかりしが、チ〜道理〳〵我とても主君流罪に逢賜ふ上は都にとゞまる筈なけれど、御館沒落以後御臺樣のお行衛しれず先づ此方を尋れふか筑紫の配所へ行ふかと、取つゝ置いつ心はゝやれど其方がいふごとく、年寄つた親人の七十の賀の祝ひも此月これも心にかゝる故思はず延引互に思ひは須彌大海、ぜひもなき世の有樣と、兄弟顔を見合はせて涙僅す折からに、鐵棒引て先拂ひ先退て片寄れと雜式がいかつ聲、櫻王立寄どなたぞと尋れば本院の左大臣時平公吉田への御參籠出しやばつて鐵棒くらふなと、いひ捨て急ぎ行く、何と聞たか櫻王齋世の宮菅相亟を憂目に逢せし時平の大臣存分いはふじや有るまいか、成程〳〵、よい所で出つくばしたと兄弟道の左右に別れ尻引つからげ身がまへし今や來たると。

（末本）車塲の段

程なく轟く車の音商人旅人も道をよきる時平の大臣が路次の行粧さながら君の御幸の如く隨身菅侍前後に列し大路せばしと輾らせたり。兩人こかげを飛び出で車やらぬ〳〵と立ふ

さがるヤア何者なれば狼藉する見れば松王が兄弟梅王丸櫻王ムゝ聞へた主に放れ扶持にはなれ氣が違ふての狼藉か但しは又此車時平公と知つてとめたかしらひでとめたかへん答次第用捨はせぬと白張の袖まくり上つかみひしがん其勢ひ梅王丸ゑひ笑ひヘーヘハーハ〜〜ハ〜〜〜ヤアいふな〳〵氣も違はれば此車見ちがへもせぬ時平の大臣齋世親王菅相亟ざん言によつて御沈落其無念骨髓に徹し出合所も百年めと思ひもうけし今日只今櫻丸と此梅王牛に手なれし牛追竹位自慢でくしひ肥た時平殿のしりこぶら二ツ三ツ五六百くらはされば堪忍ならぬ言はれぬ主のかた持顔出しやばつて怪我ひろぐなヤア法に過ぎた案外者アレぶちのめせ引くゝれと供の侍聲ごえに前後左右に追取り卷兄弟は事ともせず取つては投退つかんではぶち付け〳〵投付ればあたりに近付く者もなし（まてろふ〳〵まてろふやい）ヤア命しらずのあばれ者いづれもはおかまひ有な御主人の目通り御奉公は此時節兄弟と一つでない忠義の働きお目にかけんコリヤやい松王が引きかけた此車とめらゝならとめて見よやいと鼻づら取つて引出す車ホーウ櫻丸梅王丸爰になくばいざしらず一寸なりとやつて見よヤイ車の内ゆるぐと見へしが現はれ出たる時平の大臣ヤア牛扶持くらふ青蠅めら轅にとまつて邪魔ひろがば轍にかけて敷殺せヤア左いふ大臣を敷殺さんと碎けし轅を銘々提げ大臣を打んとふり上るヤア時平に向ひ推參なりとくはつと睨し眼の光り大千世界の千日月一度に照すが如くにて遠の梅王櫻丸思はず後へたぢ〳〵五体すくんで働かず無念〳〵と計りなり何と我君の御威勢見たか此上に手向ひすると御目通りで一討と刀の柄に手をかくればヤア松王待々雁金巾子の冠を着すれば大君同然大政大臣となつて天下の政を執行ふ時平が眼前血をあへすは社參の穢れ助にくいやつなれ共下郎に似合松王が働き忠義にめんじて助けてくれるハレ命冥伽なうづ虫めらウ〜アハウ〜アハ〳〵〳〵〳〵アハ〜〜〜〜〜〜〜と邊をにらんですゝみ行ふり返つて松王丸よい兄弟をもつて兩人共に仕合せ者命を拾ふた有がたい忝ないと三拜せよといはれて兩人くはつ

茶筌酒の段

竹本錣太夫
豊澤新左衛門

人形

親　白太夫　吉田小兵吉
百姓十作　吉田玉市
嫁　八重　吉田扇太郎
女房千代　吉田文五郎
女房ばる　吉田文作

とせき上エゝおのれにも云分有れ共親人の七十の祝賀儀濟までナフ梅王チゝ其上では松の枝々切折つてかたきの根をたち葉を枯さんチゝそれは此松王も親父の賀を祝はふた後で梅も櫻も落花微ぢん足もとの明い中早く去れ〳〵ヤア推參な歸るをおのれにならはふかとつめ寄〳〵兄弟三人互ひに殘す意趣遺恨にらんで左右へ、別れ行く。

（床本）茶筌酒の段

別れ行く、春さきは在々の鋤鍬迄も樂〳〵と、あそびがちなる一農、一番村では年古き人にしられし四郎九郎、律義一遍とりえにて菅相亟の御領分、佐太に手輕き下屋敷、お庭の掃除承はり松梅櫻御愛樹に土かい水の養も根が農の鍬仕業我身の老木厭なく幹をこやしの百姓業畑の世話より氣樂なり、堤端の十作も鍬打かたげ門口から四郎九郎殿内にかとはいるを見付コリヤ十作畑へかイヤ今仕廻て戻つたりや嬶がいふには何やらめでたい祝ひじやてて、大きな重箱に眼へはいる樣な餅七つ、朝茶の鹽にも喰足れどもらはぬよりも忝ない禮もいひたし祝ひとはマア何でござる、サイノ菅相亟樣のふつて湧た御難儀を下に住おらゝが身、祝ひどころじやなけれど、せにやならぬさかいで仕るは仕るが世間へも遠慮が有で、彼岸團子程な餅七ツ宛配つたは、此四郎九郎、丁度七十、この春年頭のお禮に登つた時おらが年をお尋れ、七十と申したりや、古

來稀な長生。其上めづらしい三つ子の爺親、禁裏から御扶持下され、悴共は御所の舍人、めでたい〳〵、産れ月、産れ日産れ出た刻限違へず七十の賀を祝へ、其日から名も改めてノウ聞かしやれ、伊勢の御師が何ぞの樣に白太夫とお付けなされた、則ちけふが誕生日白黑まんだらかいは掃溜へほつてのけ、けふから白太夫と言ふ程にそふ心得て下され、夫はめでたい序ながら問ましよ、三つ子産と扶持下さる、其謂も聞かしやつたか、サイノ死だ女房が産だ時は邊隣の外聞、ひよんな事じやと思ふたがもつけの幸、三つ子の爺親、一代は作り取の田地三反、日本斗じやないげな、唐迄もそふじやてて、男の子なりや御所の牛飼、女良なれば東童とやら是も御所で仕はる〳〵、法式は忝ない物旦那殿は流罪なれど、おらは所も追い立てられず下された田地は其儘そちの嬶も若い程に産すならおらにあやかりやと咄の中途、たどりくるは櫻丸が女房八重、けふは舅の祝ひ日とて、風呂敷包片手に提げ、嬉しや爰じやと笠取れば、ホヽ櫻丸が女房八重か、早かつた〳〵外の嫁御も揃ふてくるか、マア上つて拘もときや、アイ〳〵まだ皆樣はお出ないか、遲かろと氣がせいて、淀堤から三十石の飛乘船の足の早いので草臥もせず早來たが仕合せでござんする、コレ四郎九郎殿、お客そふなもふいにまよヱ〜四郎九郎とは物覺へがない十作、白太夫じや忘れやつたかいの、イヤ忘れはせぬわいの餅の祝とは格別、名酒呑ればいつ迄も四郎九郎ハレヤレ盛た酒が飲ぬとは但しはまだ飲足ぬかへゝぬけ〳〵と嘘いふわちよおらに酒いつ盛たチヽさつきに盛た樽や德利は目に立つゆへ餅の上へ茶筌の先で酒搥打てやつたので二度の祝ひ濟だじやないかヱゝそれで聞へた、嬶が酒くさい餅じやと云た、外へは遠慮でそふ仕やろとおらは日來懇だけ、晩にきて寢酒一杯お客是にと出て行、嫁ん女アレ聞きやつたか、今の世の人はきめごまかで、おらが始末の手目見付けて、晩にきて寢酒たべふ、ハヽ〜ヽアヽせち賢い懇ぶり、イヤ又お前も餘りな聞きも及ばぬ茶筌酒、ホヽヽヽハヽヽと嫁と舅の睦じさ、梅王松王兄弟の女房かくる道草も、女

子の手業笠に摑みこむ蒲公英、嫁菜狗泡の垣根を目印にサア爰ぢやおはる様、マア先きへイヤお千代さんからと、相嫁同士が門での辭儀合、白太夫おかしがり、一時に産だ三つ子の嫁共先の後の所かい、八重がとふから待て居やる、どちこちなしにはいれ〳〵、ほんに八重様はやかつたござんする道なれば、はるが所へ誘ふても下さんしよかと、待た程が遲なはつて心せきな道すがら千代様に行き合ふて連立て來る道てんごう、けふの祝ひのしたしにと嫁菜、蒲公英二人の仕業夫はよふ氣がついた、はる様誘ふ約束も、日足のたけた氣ぜきして寄る事も忘れたに、お千代様とはよいお出合、サイナおはる様に逢たはわしが仕合せ、賑かな道連それはそれぢやが親父様御料理の拵へ出來て有かへ、イヤ出來てない、わごちよ達にさす合點、こて〳〵とむつかしい事は入らぬ、けさ搗た餅で雜煮仕や、上置きはしれた昆布、隙の入らぬやうに茹て置た、大根も芋もそこにある勝手は知るまい、ヤアえい〳〵と立上れば、イヤ申、けふの祝ひはお前が目當料理方の出來るまで何にも構はず一寢入なされませ、勝手しられど三人寄つて何もかも取り出す、そふじやでゝ立た次手棚なものおろしてやろ、コレ〳〵是見や、祖父の代から傳はつた根來椀じや、折敷も拾枚、おらが息災なも此椀折敷堅地なとてかんまへて手荒ふ當るな嫁女達、此マア悴共はなぜ遲い來る一斛と体を横にさし枕堅地作りの親仁なり、コレ皆様何ぼう、あの様におつしやつても雜煮ばかりでは置かれぬ、飯も焚ざなるまいし何はせいでも鰹鱸、道草の嫁菜お汁によかろ、八重様ちよ様頼ます、此はるは飯仕かけふと手んでに俎板摺粉鉢、米かし桶にはかり込み、水入らずの相嫁同士、菜刀取つて切り刻みちよき〳〵〳〵と手品よく、味噌摺る音もにぎはしゝ、白太夫目を覺しコリヤ悴共はまだこぬか、正月から知れて有るおらが祝ひ日、油斷せう筈はないが、アゝ此中誰やらチゝそれ〳〵今いんだ十作が咄しには時平殿の車先きで三人の子供が大喧嘩聞てかさしらしてくれた喧嘩の様子嬢達はしつて居よ、車先きでの事とあれば。時平殿に奉公する松王が女

房、爰へきて様子を言やと名指にあふたは千代が迷惑、お祝ひ事の濟まではお前の耳へ入れぬがよいと三人ながら其心、いらぬ事しやべられて隠されれば申します、梅王様櫻丸様二人の相手にこちの人、日頃の短氣言上つて兄弟喧嘩したが氣遣ひなされますな、三人ながら怪我もなく、其場はそれで濟だれ共、もちやくちやいふて居られます、はる様八重様お前方もそふであろ、氣の毒な男の不機嫌、成程〳〵、ちよ様のいはんす通り、けふの祝ひをいゝ立て兄弟御の仲なをし親御のお詞がゝらいでは、男思ひの壁訴訟、エゝわごりよ達に問たらば知れうと思ふた喧嘩の筋知つて居ても言はぬが、同じ胤腹・一時に生れた悴でも心は別々、よふ似た顔を二々子でいへど、それもそれには極まらぬ、女夫子も有る又顔の似ぬ子もある、マア大概顔が似れば心もよく似て、兄弟の中もよいものじやがおらが悴共誰が見ても一作とは思はぬ、生ぬるこい櫻丸が顔付、理屈めいた梅王が人相、見るからどふやら根性の悪そふな松王が面がまへ、ヤ千代が傍で麁相いふた氣にかけてたもんな、マア、怪我がなふて嬉しうおりやる、怪我の次手に孫めは健なか、連て來て顔見せいで、ヤアとかふいふ中もふ七ツじやおれが生れたは申の刻限料理も大かた出來たであろ、嫁達膳を出さぬかい、アイ〳〵〳〵刻限の過る迄連合衆はなぜ見へぬ、千代様八重様、道までいて見てこまいか、爰で待つとより三人ながらござんせいかふ、マア嫋達何言ふぞい、子供共は來て居るはい。アノ來てちやとは、どこに〳〵、エゝどんな嫁共、そこに居るを得しらぬかい、コレ三本のあの木が子供等、梅王松王櫻丸顔は殘らず揃ふて有れ、勿体ない菅相亟様くゝめるやうにいはしやました、生れ日の刻限が違や悪い、祝儀にはかげの膳もすへるならひ、サア〳〵早ふと白太夫が、いふに猶豫もなりがたく俄に盛るやら箸打つやら、椀の向ふの小皿にごまめ、まづ一番に親父様、是でおすはりなされませと、給仕は元よりならはれど見馴聞馴、擧動ひ、八重が配膳、御所めけり、イヤおれもあそこへいこイヤ土間では冷が上ります、やつぱり爰でと押備

へ、是から面々夫の給仕膳を捧げて庭におり、此梅の木が梅王殿枝ぶりすんと日頃の氣質、八重が連添ふ男ぶり、木ぶりも吉野の櫻丸、是ぱ千代まで添ひ遂る女夫が中の若緑り色も艶々勢ひよい、松王殿で子達も揃ふ、サア親父様目出たふお箸なされませ、ホヽなされふ共〳〵親がいに座が高い、子供共へドレ挨拶、ハテもふそれには及びませぬ、お加減のさめぬ内イヤ〳〵お春そでおじやらぬ、親でも子でも極つた辭誼作法と庭におりるもまめやかに樹の前に畏まりイヤ是子供衆、何にもござらず共よふまいつて下されい、親が折角おりての辭宜、辭宜返しがしたふてもいごかれぬはしれて有る爰で〳〵ハヽヽヽ嬶達餅を替やいのと尻もちついて悦び笑ひ、我膳に押直り、箸を取るよりムウ〳〵扨盤梅じや味し〳〵、三人の嫁女達給仕も片いきせぬ樣に、三ばいは喰合點で、おじやらしまするじやなんよへハヽヽヽこりや新しい三方土器誰が持て來ましたぞ、イヤそれは八重樣の、ハテ氣が付て添けない、春も何ぞくれるかい、ほんに忘れておりましたと、扇三本袖土産中の繪は梅松櫻お子達のかづを祝ふて三本ながら末廣がり目出度ふ祝ふて上まする、こりやめでたい添い、中の繪も咄しで知れた、明けて見るに及ばぬ此儘〳〵戴きまするとこ機嫌に千代が秋から是は切の有合いでわたしが縫た手筒頭巾、つむりにあはずば縫直さふ、お召しなされて下さんせ、チヽどれも〳〵不足もない心付きなくりやり物、サア盃も濟だは、おれが膳から上てたも、子供等が膳は盛たまゝ、冷たで有らふ盛直してコレ嬶達二人前づゝ喰てたもや、イエ〳〵私等はまそつと待て、主達が見へてから打並んで祝ひましよ、そんならそれよ、おれは村の氏神樣へ參つて來ませふ、そんならお參りなされませ、チヽ〳〵往きませよ、拵へて置た十二銅そこに有る取てたも、三本の此扇、末廣ふに子供の生先氏神へ賴んだり見せたりせう、ヤア八重はまだ參るまい次手ながら連立ふ、サア〳〵こちへと機嫌よふ表を、

喧嘩の段

役毎日替り

豊竹つばめ太夫
豊澤仙太糸
豊竹澤呂叶夫
鶴澤相生大助
豊本廣

人形

松王丸　吉田榮三
梅王丸　吉田王松
女房千代　吉田文五郎
女房ばる　吉田文作

（床本）喧嘩の段

さして出で行く、コレ千代様、年寄しやつてももの覺へがよい事こなたさんや此春は氏神様しつて居る、入重様は今が始め、いはしやんすりや其通り、物覺へのよい親御に違ひ、物忘れする子供達、松王殿なぜ遲いぞ、こちの夫もなぜ見へぬ、但しはこぬ氣か、けふ見へいでよいものかいな、それそこへ松王殿マ是女房を立つそに立たして刻限過ぎたを知らずかい、ヤアべり〳〵とかしましい時平様の御用有て夫仕廻ればいごかれぬ、先へ參つて其譯いへと言付たを忘れたか、梅王も櫻丸もまだこぬそふな、親仁殿も内にござらぬ、サア其親父様は八重様を同道で、もちつとさきに氏神參り兄弟衆はまだ見へぬソレ見いな、遲いといふおれは主持ち、梅王も櫻丸も主なしの扶持放され、用もないわろ達が遲いのがほんの遲いの、お春殿そじやないかと詞の端にも殘る意趣、梅王も日脚はたげるせいて來かゝりつゝかう、松王には顔ふり背け、お千代殿けふは大儀コリヤ女共親人と櫻丸、八重も爰にはなぜ居やらぬ、イヤ今も松王様のお尋れ、櫻丸様はまだ見へぬお二人は宮參り、ムゝ櫻丸はどふやてこぬな、ア待兼る者はこいで、胸の悪い見とむない頬がまへと、梅王に當こすられ松王丸逸徹短慮あたぶの悪いれすり言、いひ分有らば直にいやれさ、何のわれに遠慮せう、わが頬がまへを見る度々ゲイ〳〵と虫

唾が出る。ハーーーハレ申したり腹の皮此松王は生れ付て涙もろい、櫻丸やそちが樣に、扶持放されの痩頤い、ひだるからふと思ふてやるが兄弟のよしみ丈おゝ扶持放されと笑ふやつが喰ふ扶持がろくな扶持か鐵丸を食すといへ共心穢れたる人の物を請けすといへ八幡大菩薩の御託宣、心汚れた時平が扶持有がたふ思はな、人でなしの猫畜生ヤア畜生とは舌長な梅王、今一言いふて見よおゝ、望みなら安い事畜生〳〵どふ畜生、もふ赦されぬと松王丸刀の柄に手をおくれば松王も反打かへし詰寄つめよる二人の女房、是はマアおとましい氣が違ふたか梅王殿と千代が夫を抱止むれば七十の賀を祝ひに來て親父樣に逢もせず反打てどふさしやる、祝ひ日に拔てよいかこちの人梅王殿と刀の柄にしがみ付く女房春を取て突き退け、七十の賀でも祝ひ日でも堪へ袋のやぶれかぶれ、留立して怪我するな、コリヤ松王後れたな、女房か留るを幸に煩げたに似ぬ腕なしめチヽ留らるゝを幸ひとは、我心に引きくらべて松王には慮外の雜言身か女房が留たよりそちが女房が親にもまだとの一言、肝先へきつと當りこらへ〳〵こらへたがもふたまらぬ、眞劔の勝負は親人に逢ての後それまでの腹ひせに砂かぶらせれば堪忍ならぬ、千代に是を預けると兩腰拔てほうり出し裾引からげて身拵へおゝ畜生めがこりやよい了簡、櫻丸が來るまでは松王が命松王に預けると同じく兩腰ほうりすて。双物を渡せば血はあやさぬ、女房共邪魔するなと、すつと寄て緣より下へ踏落せばさそくの松王落ちさまに諸足かけば梅王丸眞逆樣に落重り、摑み合い擲き合い、組んでは放れ離れては又組合い捻じ付け引ふせ蹴つ踏づ、双方力も同年、血氣盛りの根くらべ千代と春とは二人の兩腰、取れもせうかと氣遣ひ半分儀へも寄れず、ハア〳〵〳〵と心をあせり、氣をもみ上げごちらが勝も負もせず擲き合たが二人の存分、梅王殿もふよいわいな松王殿もふおかしやんせ、止て〳〵といふをも聞かず、勝負、つかではむざ働き投げてくれんと松王丸かさにかゝつて押す力、ひるまぬ梅王つゝかへる、肩先ひれつてがつくりさせ横に抱へる松の木腕、劣らぬ肘骨

櫻丸切腹の段

役毎日替り

豐竹古靱太夫　鶴澤清六　竹澤土佐太夫　竹澤吉兵衛　野澤津太造　竹本綱

梅の木腕、からみもぢつて、押合ふ力、双方一度にこけかゝり、もたるゝ拍子櫻の立木、土際四五寸殘る木の上ばほつきりぐばつさりと折たに驚く相嫁同士、二人が勝負も破角力俱にあきれて手を打掛ひうろつく中へ早下向、アレ親父様のお歸りしや、白太夫様のといふ聲に二人ば肩入れ裾おろし腰刀指す間も、

人形

親　白太夫　吉田小兵吉
松　王丸　吉田榮三
梅　王丸　吉田玉松
女房　千代　吉田文五郎
女房　ばる　吉田文作
櫻　丸　桐竹紋十郎
女房　八重　吉田扇太郎

（床本）櫻丸切腹の段

有らず戻られし年は寄てもこはいは親、上へも上らず犬蹲踞けふの御祝儀お目出度いと、祝儀は逃ても赤面し塵をひれらぬばかりなり、親ばほや〳〵機嫌顔、嫁達が先へ來て七十の賀を祝ふてくれたで、けふの祝ひばさらりとしもた。しれて有る刻限遲いは何ぞ障りが有つてこぬに極めた、梅王松王よふこそ〳〵來てくれた。コレ二嫁女煮くちたで有ふが雜煮祝ばしてたもつたかと折た櫻ば見ながらも誰が仕わざぞと咎めもせず呵るところを呵らぬ親、一物ありと知られたり、梅王丸懷中より用意の一通取出し祝儀濟で候へば私の所存の願ひ是に書付け候と親の前に差出せば松王も又一通身の上の願ひ是に有りと同じ所へ直せしばいひ合はせたる如くなり、白太夫打笑ひ心安い親子兄弟夫婦斯並んだ中願ひ有らば口でいはいでぎつとした此書付けさらばおらもぎつとして代官所の格で捌こと願ひ書手に取り上げ、つぶ〳〵讀も口の中、願ひば何やら聞へねど春と千代とは夫の心知つてゐる

筈後先きをしられば案じる八重一人、三人の兄弟闘爭親父様お頼み申し、けふ中直しと言ひ合はした千代様春様こりや何ぞい、何たいふてもこちの人櫻丸殿ござらぬゆへ、心當が皆違ふた道で眩暈がおこつたかと見へぬ男を案じるやら二人の顧ひも氣にかゝり小首傾け案じ居る、親父は二通讀仕まい、コリヤ梅王そちが願ひに旅へ立隙くれとは、ムゝ推量するに外でもあるまい菅相亟のござる島か成程〳〵、結構な御殿に引きかへ垣生の小屋の御住居、御用聞く人なければ梅王下つて御奉公仕らん、身のお暇を申ける、ムゝ恩を知られば人面獸心といふてな、顔は人でも心は畜生、島へ參つて御奉公がしたいとは、まんざら恩を辨へぬ畜生氣は離れた心、コリヤやい御臺様や、若君様おかはりも遊ばされず、ござる所も知れた上旅立の願ひじやな、イヤ御臺様は其以來お目にもかゝらず御座所も存じませぬ、併し女儀の御事なれば若君様とは又格別、菅秀才の御事は慥かにといはんとせしが松王を尻目にかけ、慥に所は存ぜれ共息災に御座有る噂さ、ヤイ馬鹿者、大切な菅秀才様息災なを聞たばかりお目にもかゝらず有家もしらず、それで儕忠義が濟か、女儀の身とぬかしおる御臺様は主じやないか、コリヤやい尤御不自由な配所の御住居お儕へ參つて御用を聞く膝行役の奉公は此白太夫がよい役ぢや、はて血氣盛り奉公盛り、菅相亟の所縁と有れば根堀り葉堀り絶さんとて鵜の目鷹の目、油斷ならぬ讒者の所爲すはと言ふ時、身を惜まず御用に立所存はなふて、膝行役願ふは命が惜いか敵がこはいか、旅立ちの願ひ叶はぬ〳〵取上げぬと願書顔へ打付けてはつたと睨む老の腹立、道理至極に梅王夫婦、誤り入つたる風情なり、ヤイ松王そちが願ひを見れば勘當を請たいとなハアハゝゝゝゝ神武天皇様以來珍らしい願ひじやなエゝ不孝者といはゞ譬のないやつ、餘り珍しい願なれば、聞届けてくれるぞと親の了簡、ハゝハア忝しと悅ぶ松王勇み立ち親子兄弟の縁を切る所存も問はず赦されしは此松王が主人へ忠義推量有つての事なるべし、ハゝゝゝいかさま口は調法なものぢやな、主人への道立て臍がくれるわい、道

も道に寄つてはな横にとつて行く道を蟹忠義と言はいやい、甲に似せて穴を堀ると、勘當うければ兄弟の縁も離れ時平殿へ敵對ば切つても捨んの所存よな、尤善惡差別なく主へ義は立つにもせい親の心に背くをな。天道に背くといふわい、望み叶へてとらする上は、人外め早歸れ、隙取ば親子の別れ仇幕くらはさふと筋骨立て怒り聲、松王は思ひのよま女房こいと引立行く、千代は遠に親兄弟名殘も惜き相嫁の顔を見るもあかれぬ涙、袂絞つて出て行く、ハーヤレ嬉しや面倒なやつ片付たヤイそこな馬鹿者、御臺若君の御行衛、尋にいかぬか、うせぬかと是も手づようきめ付けられそんなら嗚へばさあ行所へはおれが行くわい、出て行くをこばがるおはる、八重樣あとで能いやうにお詫言をと言捨て夫婦は門へ白太夫は唖を呑込んで奥へ行く、兄弟夫婦に引別れ取殘されし八重が身の仕廻もつかぬ物思ひ門へ立そに待つ夫思ひがけなき納戸口、刀片手に完爾と笑ひ女房共嘲待つらんと、聲に恂りはしり寄り、ヤアいつの間にやら來た共言はず案じる女房を思はぬ仕方、兄弟衆の事に付て親父樣のお腹立、其場へは出もせいでマアなんでこな樣は納戸の内に、エーこれナア譯を聞かして〳〵と聞たがるこそ道理なれ、暫く有つて白太夫も出し鎧の小脇差、三方に乘せしほ〳〵と出るも老の足弱車、舍人櫻が前に置き用意よくばさく〳〵といふに女房又恂りヤアこりや何じや親父樣櫻丸殿どふぞいなア、何で死ぬのぢやや腹切るのじや切らればならぬ譯ならば未練な根性さぎやしませぬ、こなさんが言はれずば親父樣の只一言案じる胸を伏めてたゞお慈悲〳〵と手合せ泣より外の事ぞなきヤア親人に何御苦勞、是まで馴染夫婦の中、所存殘さず言ひ聞かさん某が主人と申すも恐れ多き齋世の君樣、百姓の倅なれ共菅相丞樣の御不便を加へられ親人へは御扶持方、御愛樹の松梅櫻、兄弟が名に象り松王、梅王、櫻丸、憚り有や冥加なや烏帽子子になし下され御恩は上なき築地の勤め、三人の其中に櫻丸が身の幸、人間の胤ならぬ竹の園の御所奉公、下々の下だる牛飼舍人、勿体なくも身近く召され、菅相丞の姫君とわりなき

中の御文使ひ、仕課せたが仇となつて讒者の舌に御身の浮名終には謀叛と言ひ立られ、菅原の御家没落是非もなき次第なれば宮姫君の御安堵を見届け義心を現はす我生害けさ早々愛まで來て右の段々生て居られぬ最期の願ひ、きゝ屈けて切腹刀、親の手づから下されたはい、女房共我等にかはつてお禮も申し死後の孝行頼むぞと義を立守る夫の詞女房わつと聲を上げ仇なる戀路のお媒介齋世樣の御惡名相亟樣の流され賜ふ其言譯に切る腹なら此八重も生ては居られぬ私は殘つて孝行せいと胴慾にもよふいはれた、それよりはまたむごい腹切禮を申せとは、それが何の禮どころ無理な事いふ手間でいつしよに死とコレ申し女房の願ひ立てたべ、親父樣の思案はないか、コレ俯いてばかり〳〵御座らず共よい智恵出して下さいませ、夫の命生死は親父樣のお詞次第、お前は悲しうございませぬか、親の手づから此三方腹切刀は何事ぞと恨つ頼つ身を投げ伏もだへこがるゝ有樣はものぐるはしき風情なり、白太夫顔ふり上げ子に死といふ腹切刀、むごい親と思ふいひ譯ではなけれどな、此曉は我身の祝ひ、いつもより早く起門の戸明れば櫻丸やれ早ふ來てくれた陸なれば夜通し、但しは船かサアまあこちへと呼入れて樣子を聞けば右の次第、白太夫づれが伜には驚き入た健氣者とゞめても聞入れずけふの祝儀仕まふまで、女房が來ても逢しはせぬぞ、おれが出ひと言ふまでは納戸の内に隱れて居いと一寸延した命をかはひ助けてよいか惡いかはおらが了簡に及ばず神明の加護に任さんと最前祝儀にくれた扇三本幸繪には梅松櫻子供の行末祈る顔で氏神の祠へ直し置信を取て御籤の立願櫻丸が命乞、中の繪は上から見へぬ三本の此扇、初手に櫻をさらしてたべヘエー上らせ賜へと再拜行念、取上げた扇ひらけば梅の花、南無三是は叶はぬ告か神の心を疑ふ御籤の取直しせぬものなれ共助けたいが一つばいで取直す次の扇、今度も違ふて又松の繪頼みも力も落果て下向すりや折た櫻、定業と諦めて腹切刀渡す親、思ひ切て

おりや泣かぬ、そなたもなきやんなヤ、ヤ、ヤ、〳〵〳〵アレ聞たか女房共、櫻丸が命惜まれて、老人の心づかひ御恩も送らず先達不孝御赦されて下されい下耶ながら恥をしり、義の爲に相果ると三方取て戴くにぞもふコレ今が別れかと泣も泣れぬ夫の覺悟、白太夫目をしばたゝき潔い伴が切腹、介錯は親がする、其刀コレ見やれ、と懐から取出すは願ひ込だる鉦撞木、コレ此刀で介錯すれば未來永劫迷はぬ功力利劔即是彌陀號と撞木を取て打鳴らす鉦もしとろに南無阿彌陀〳〵南無あみだ〳〵〳〵南無阿彌陀〳〵〳〵念佛の聲と諸共に襟押くつろげ九寸五分弓手の脇へ突立れば八重が泣く聲打つ鉦も拍子亂れて南無あみだ〳〵〳〵〳〵右のあばらへ引廻し憚ながら御介錯チヽ介錯と後ろへまはり撞木振り上げ南無阿彌陀佛と打や此世の別れの念佛、九寸五分取直し、喉のくさりを刎切つてかつぱと伏て息絶たり、八重が覺悟も此場をさらず夫の血刀取上る枳穀のかげより梅王夫婦はしり寄てこりや何事と九寸五分もぎ取り捨、親の前に畏りコレ〳〵先程歸れと有りし時表へは出たれど櫻丸がこぬ不思議と、相亟樣の御秘藏有し櫻の折たも詮議もなされぬ、彼是不審に存ずるから裏より忍び立戻り始終の樣子は承はつた、是非に及ばぬあの樹と倶に枯し命の櫻丸、兄弟の最期餘所に見て親人の鉦皷にあわせ、女夫の者が忍びの念佛あつたら若者殺せしと悔む夫婦も聞く親も八重も死なれぬ身のくり言是非も涙に南無阿彌陀佛と鉦打ち納め撞木さかはる杖と笠、白太夫は片時も早く菅相亟の御後墓ひ嶋へ赴く現世の旅立ち、櫻丸が魂魄は未來へ旅立、此亡骸梅王夫婦を賴むぞと、八重が事までつゞ〳〵に賴む詞の置き土産、冥途のみやげは只念佛、南無阿彌陀佛〳〵〳〵南無阿彌陀佛〳〵〳〵なむあみだ笠打ちかぶり西へ行足十萬億土亡骸送る親送る生ての忠義死したる義心、一樹は枯れし無常の櫻、殘る二樹は松王梅王三つ子の親が住所未世にそれと白太夫、佐太の社の舊跡も神の惠としられける。

天拜山の段

竹本大隅太夫
鶴澤道八

人形

菅相亟　吉田榮三
白太夫　吉田小兵吉
安樂寺僧　桐竹政龜
梅王丸　吉田玉松
鷲塚平馬　吉田多三郎

（床本）天拜山の段（四の口）

君を思へばよやヨホイホむすぼれ糸の、ハリヤとけぬ心がつろござるはよ、つろござる、つゝき築紫に立つ年月御いたはしや菅相亟ざんしやの業に畢せられ、埴生の小家の起臥もきのふとくれて、けふは早延喜三年如月半、空も春めく野山のながめ、野飼に召させ奉り、我樂しみは在郷歌、君を思へばよやヨホイホハーヽハア何をがなお氣晴し、しばらくさいどつてう聲ばかり、殿の手前も面目ないエヽ、見れば見る程見事な毛並、角の構へ眼の備へ頭持の樣子、骨組肉あい惣毛一色眞黑黑ばかり渡り、繻子も及ばぬ色艶、天角地眼一黑直頭耳小齒違天晴れ御手候よちからのちよせいと響にける。菅亟相はめづらかに聞馴はぬ響詞ヤイ、白太夫、春は耕やし秋は刈穗の稻を負せ耕作の助けと成し牛の善惡よく知る答、天角地眼と申せしは角と眼の備への事、一石六斗二升とは牛を買取その價、升目に積るものやらん語れ聞んと仰ける、さつてもしたり天下に有とあらゆる事どもあまさず洩さず知つてござる亟相樣、牛の事は御存じなくお尋れに預かるは百性に生れた一德、お慮外ながら牛の講譯聞しやりませ、一黑と申すは俵物の石目ではござりませぬ、毛色を吟味する時は、黑いが極上それで一黑次に直頭とはあたまの見所頭とばかしら、どつちへも傾ず、まんろくながよいさかいで直頭と申します耳小

の耳は耳小はちいさし隨分耳ばちいさし、隨分耳はちいさいを好みます扨齒違ひとはきやつがおれ〳〵咽を かむ、上下の齒先揃ふは惡し五一に生たが齒違の齒の見所次第を上から言立れば一石六斗二升八合牛の講譯もう仕まいでござまする、誠に性は道に依て賢し、白太夫が咄を聞一つの德を得たるはと仰にひよこ〳〵小踊して、こりやマアあんたる仰ぞい親の代から御領分の百性三つ子の事までお世話になされ御恩に御恩有がたうてれた間も忘れぬ此親と違ふて三人の悴共一人は死る後二人は氣も揃はず面倒なやつら打ほうつて、此太宰府へ參つたは去年の三月、うそ淋しい不自由なお住居一年の日數は立てど月見花見に出もなされずけふは何と思召牛引と有御意が出て、私がしはも腰もアー延やかな春の野面安樂寺へ御參詣は御歸洛の御立願でござりませう、いやとよ我に科なければ佛に苦勞かけ奉り身の上祈る心はなし、ざんしやの業としろし召さば罪なき事も世に現はれ歸洛の勅諚下るべし、それまでは菅亟相月にも花にも目はふれず私なき臣が心、帝はしろし召されず共天の照覽明かなり。安樂寺へ志は此曉不思議の靈夢。菅亟相が愛樹の梅、今如月の花盛り都の住居、思ひ寂の枕の硯引寄せて筆に任せてかくばかり、東風吹かば匂ひをこせよ梅の花、主なしとて春な忘れそと心を延てまどうみしに妙なる天童我枕に立せ賜ひ、汝憐愍の心深く仁義を守る忠臣の功、心なき草木まで情を受けし主をしたひ花物いはれど其しるし安樂寺へ詣見よと示現に依てと宣ふ所へ安樂寺の住僧杖を便りに老の足、それぞと見奉りしより小腰をかゞめ立寄は亟相鞍よりおりさせ賜ひ、住侶の歩行は何國へぞ、我は貴院へ行折から是にて對面祝着〳〵、ハア愚僧儀も外かならず、公の御目にかかりたく參る仔細餘の儀にあらず、夜前不思議の靈夢の告、御慈愛の梅一樹配所の主じに見せよとある、示現にかはらぬ觀音堂の左の方、一夜に生出る不思議さよと、語る間も正夢の割符を合せしごとくなり、是より寺へは程近しと住侶伴ひ御歩路、安樂寺に入賜へばそれぞとしるき梅花の薫り、袖に留木の心地せり、暫く是にて御

ながめと床几直させ蹲を設け、御菓子小竹筒と住寺の饗應白太夫はこつてこの梅の土際覗きまはり、こりや不思議イヤ稀代じや申し亟相様道すがらお住寺の夢咄し、何をやらるゝやら、そんな事がよふ有ふと誠しない事疑ておりましたが來て見て恟り此木の枝ぶり花の匂ひ、佐太のお下屋敷に預つておりました、それぢや〳〵其梅でござりまする、アゝ神の告は爭そはれぬ、おらが爰へ來た後では水一ぱい呑人もあるまいにぶき〳〵とした木の色艶、目立のずあいがつういつい、花はうざる程、付いたれば梅漬の時分二三斗は慥にならふ、四五升は地を借た年貢代、お寺へも進ぜます後はこつちの實入り〳〵今は先腹の實入、御馳走沖下さりましよ、アゝこれお酌、白太夫が盃はいつで此も天目、立酒は氣にかゝると床几の傍にちよつゝくばい口も心もありのまゝ見へた通りの律義者、花のながめに一入の興を催しおはする所にそりや喧嘩よアリヤ、拔た、切合てそりや來るは寺内へ入な門うてといふ間あらせず踏込〳〵打合戰ふ二人、寺僧は驚き白太夫御座を圍んで、アゝこれ〳〵見れば双方旅裝束、喧嘩はふり物とあつてから爰で仕まいは付させぬ出やれ〳〵といふをも聞かず切合一人は我子の梅王コリヤマアそちは何としてハア〳〵ひあ切られなと氣をもみあせる親心、聲の助太刀、相手の刀、梅王に打落され逃るをすかさず飛かゝり片手摑みにもんどり打たせ膝にかためし健氣の振まい、ヤレ〳〵出かした手柄ヤ〳〵手柄はしたが喧嘩の次第、次にはそちが下つた樣子都の事を案じてございます、幸い是に亟相樣の樣子一々申上い、ハツハア恐れながら梅王が念願達し、かばらせ賜はぬ御尊体、見奉るは生涯の本望、都に御座あるお二人樣世を忍ぶお身なれば一所には置きまされず若君樣は武部源藏に預け置き私が妻櫻丸が女房八重と春とは御靈樣の御介抱、お身の上は指置かれ配所の樣子見て參れとの仰に幸ひ出船の手番、天運に叶ひ日和まん千里一は日數も込ず夜前此地へ築紫船、乘合の中に時平が家來鷲塚平馬、此梅王を見しらぬ馬廻者、ふづくりかけて樣子を聞へば菅亟相を殺しに來たと儕れが口

から最期を急ぐ寺にござるをよう知て直に仕かける不敵者、梅王が御土産と早縄かけてぐつとしめ上げ、椽柱に猿つなぎ、心地よくこそ見へにける亟相御悦喜淺からず、戀しき都の樣子を知す忠義の花は有情の梅王示現によつて飛來る花は非情の此梅の木、有情非情もへだてなく菅亟相を墓ひくろ、梅に褒美の御言の葉、梅は飛、櫻は枯く世の中と何として松の連なかるらん〳〵松王は時平が舍人、枯し櫻は宮の舍人、梅王は我舍人、花の榮へは安樂寺其名も高き飛梅のふしぎは今に隱れなし、ヤイ梅王有難い今の御歌、此梅に准へ其方をお譽遊ばし櫻は枯る世の中とは死た悴を御悔づれなかるらんと有る松王めは時平に追從しておろなホ〜親人の推量違はず兄弟といふもけがらはしい、畜生めは指置いてさす敵は此鷲塚、サア時平が工み白狀せいいやさいへば刀の引導どぶぢや〳〵と立かゝるアーコレ聊示あるな主從の義を立てぬき命にかへて言はぬは古風、言はして置て殺すも古風、あたらしう助かる樣に殘らず申時平殿は王位の望み、邪魔になる菅亟相首取て立歸れ、軍陣の血祭して大望の旗を上、天皇親王院の御所、片端仕舞て天下を一呑、身共も公家になる樂しみ、空喜びの裏が來て恥をさらす縛り縄、早ふほどいて下さりませと時平が叛逆一々殘らず聞し召れし菅亟相柔和の形相忽ち變り御まなじりに血をそゝぎ眉毛逆立御憤り都の方を睨付け物狂はしく立賜へり、白太夫悔し知てある時平が工み今聞たか何ぞの樣についぞ覺へぬこはいお顏爰から睨ましやましても都へは届きませぬ御持病のつかへがおこれば悲しうございますと老のくどく物案じやをれ梅王白太夫時平の大臣が謀叛の企て、聞捨られぬ御大事赦免なければ歸落も叶はず王位を望む朝敵としろし召れぬ玉体危し、臣が忠義徒らに此所に朽果る骸は虛命蒙る共死たる後は憚なし、靈魂帝都に立歸り帝を守護し奉らん天に誓ひの我願ひ、驗は目の前白梅の、ずあひほつきと折取り賜ひ朝敵一味の佞人原、退治の手始是見よと枝にて丁度打賜へば平馬が首へ飛梅のずあいも花の亂れ燒、誠の釼も及びなき梅の名作御手の内親子は恐る〳〵ばかりなり、

寺入りの段

役毎日替り
豊竹つばめ太夫
豊澤仙太糸叶
豊澤竹呂太夫
鶴澤本相生太助
豊澤廣

ヤア汝等かゝる大事を聞からは片時も早く都に登り時平が工み奏聞せよ我は見上る此高山、絶頂に三日三夜立行荒行根氣を碎き、梵天帝釋及んら王、三天王に誓を立、魂魄雲井に鳴、雷十六萬八千の首領となつて眷屬引列都に登、謀叛の奴原、引裂捨ん、現世の對面是までなり、いそふれやつと御聲も俱に烈しきはやち風、吹き立〳〵本堂のいから破て庫裏方丈しとみ遣戸は木の葉の如く庭の立木も飛櫻も花も砂も吹きしさる親子も住寺も大きに驚、期も來らざる御身を捨天帝へ新誓あり、御本意は達する共、御臺姫君若君の御歎はいかばかり、とゞまり賜へと御袖に取付梅王、白太夫弓手馬手へ刎飛し住卒いたくな留め賜ひそ、早天帝の惠みによつて形は此儘鳴神の不思議を見せんとちり殘る梅花を取て口に含み天に向て白梅花うづまく、花びら火焔となつて雲井遙かに行末は怪し恐し。

人形

妻戸浪　桐竹紋十郎
菅秀才　吉田文枝
女房千代　吉田文五郎
小太郎　桐竹紋司
下男三助　吉田瓢壽呂
涎くり　吉田文二郎
手習子大ぜい

（床本）寺入の段

一字千金二千金、三千世界の寶ぞと教へる人に習ふ子の、中に交はる菅秀才、武部源藏夫婦の者、いたはりかしづき我子ぞと、人目に見せて片山家、芹生の里へ所替、子供集めて讀書の、器用不器用清書を、顏に書く子と手に書くと、人形書く子は頭かく、教へる人は取分けて、世話をかくぞと見えにけり、中に年かさ五作が息子詞コレ皆これ見や、お師匠樣の留守の間に、手習するは大きな

損、おりや坊主頭の清書したと、見けるは十五の涎くり、若君はおとなしく詞一日に一字まなべば、三百六十字との教へ、そんな事書かず共、本の清書したがよいと、八つになる子に叱られて、エヽませよ〳〵と指さして、嘲戯かゝるを殘りの子供詞兄弟子に口過す、涎くりめをいがめてやどと、手んで手に壓尺ふり廻す自然天然肩持つも、傳ふる筆の威德かや、主の女房奥より立出で詞又コリヤ例のいさかひか、おとましや〳〵今日に限つて連合の源藏殿、振舞に往てなければ戻りもしれぬ。ほんに〳〵こなた衆で一時の間も待かれる今日は取分け寺入もある筈、聲からは休ます程に、皆精出して習ふた〳〵。ソリヤ又嬉しや休みぢやと、筆より先に讀聲高く詞いろはに、此中は御人被下、一筆啓上候べくの、男の肩に堺重、文庫机を荷はせて、悧發らしき女房の、七つ計りなる子を連れて、賴まみせうと云ひ入るゝ、内にもそれと早悟り、こちへお入り遊ばせと、云ふもしとやか、アイアイと、愛に愛持つ女子同士、來た女房は猶笑顔詞私事は此村外れに亘うくらして居る者で御座りまする、此腕白者をお世話なされて下さりよかと、お尋れ申しにおこしましたれば、おこせ世話してやろと、結構なお詞に甘へ、早速連れてさんじました、内方にも御子息樣がござりますげなが、どのお子で御座りますぞ。アイこれが源藏殿の跡取りでござります。コレハ〳〵よいお子樣や、外にも大勢の子達、いかいお世話でござりましよ。アイ御推量なされてくださりませ、シテ寺入は此お子で御座りますが、名はなんと申します。アイ小太郎と申しまして、腕白者で御座ります。イヽヤイヤ氣高いよい御子や、折悪う今日は連合源藏も、振舞に參られましたこれは。マアお留守かいな、お待ち遠なら私が呼びにまゐりませう、いえ〳〵幸ひ私も參つて來る所があれば、其内にはお歸りで御座りませう。コレ三助、其持てきたもの、あなたの傍へあげませ。アツト答へて堺重、へぎに乘せたる一包、内儀の傍へさし出す詞これはマア〳〵云はれぬ事を、イヤおはもじながら、此子が參つたしるし此堺重は子達への土産、取ひろめて

松王首實驗の段

役毎日替り

鶴豊竹　野竹鶴　澤本澤本　綱津吉土　太兵衛太夫　造夫太佐

古靱太夫　清六

下されませと、云はれど知れし蒸物煮染、我子に世話を燒豆腐、つぶ椎茸の入たるは、奔走子とこそ見えにけれ、詞これはマア何から何まで取り揃へて、御念の入つた事、戻られたら見せませう詞イヤモほんの心ばかり宜しうお賴み申し上げます、コレ小太郎ちよつと隣村迄いて來る程に、おとなしうして待つて居や、惡あがきせまいぞ、御内證樣、往て參じましよ。と表へ出れば詞か、樣、私も行きたいと縋り付くを、ふり放し詞嗜めよ、大きな形して跡追ふのか、御らうじませ、まだ頑是がございませぬ。ソリヤ道理いな、ドリヤおばがよい物やりましよ、つい戻つてやらんせと、目で知らすれば、アイ〳〵ついちよつと一走りと、跡迫ふ子にも引さるゝ、振かへり見返り

人形

武部源藏　吉田王治郎
妻戸浪　桐竹紋十郎
松王丸　吉田榮三
春藤玄商　吉田玉幸
女房千代　吉田文五郎
涎くけ　吉田文三郎
菅秀才　吉田文枝
御臺所　吉田小兵吉
百姓　大ぜい
手習子　大ぜい

（床本）　松王首實檢の段（切）

下部、引連れ急ぎ行く。どりやこちの子と近付きにと、若君の傍に寄せ、機嫌紛らす折からに、立歸る主の源藏、常にかはりて色青ざめ内入惡く子供を見廻し詞エヽ氏より育と云ふに、繁華の地と違ひ、いづれを見ても山家育、世話甲斐もなき役に立ずと、思ひありげに見えければ、心ならず女房立寄り詞いつにない顏色も惡し、振舞の酒機嫌かば知らぬが、山家育は知れてある子供、憎体口は聞えも惡い、殊に今日は約束の子が寺入して居りまする、さがない人と思ふも氣の毒、機嫌直して逢つてやつて下されと。小太郎連れ

て引合せど、差俯伏いて思案の体、いたいけに手をつかへ詞お師匠様、今から頼み上げますと、云ふに思はずふりあをのき、きつと見るより暫くは、打守り居たりしが、忽ち面色やはらぎ詞扨て〳〵器量勝れて氣高い生れ付き、公家高家の御子息と云ふても恐らくはづかしからず、ハテ扨てそなたはよい子ぢやなアと、機嫌直れば女房も詞何とよい子よい弟子でござんしよが、よい共〳〵上々吉。シテ其連れて來たお袋はいづくに。サアお前の留守なら其間に隣村迄いて來と云ふて、オヽそれもよし〳〵大極上、先づ子供と奥へやり、機嫌よう遊ばし召され、それ皆おひまが出た、小太郎倶に奥へ〳〵と、若君諸共誘はせ、跡先見廻し夫に向ひ詞最前の顔色は常ならぬ血相、合點の行かぬと思ふた所に、今又あの子を見て打つてかへての機嫌顔、猶もつて合點ゆかず、どうやら様子がありさうな、氣遣ひな聞かしてと問へば源藏詞オヽ氣遣ひな筈、今日村の饗應と偽り、其を庄屋の方へ呼びつけ、時平が家來春藤玄蕃、今一人は菅相亟の御恩をきながら、時平に從ふ松王丸、こいつ病者なら見分の役と見え、數百人にて追取卷、汝も方に菅相亟の一子菅秀才我が子としてかくまふ由、訴人あつて明白、急ぎ首打つて出すや否や、但し踏込み請取ふや、是非に及ばず返答いかにとの引ならぬ手づめ、首打つて渡さうと請合ふた心は、數多ある寺子の内、いづれなりとも身がはりと思ふて、歸へる道すがら、あれか、これかと指折つても、玉籠の中の誕生と、孤垂の中で育つたとは似ても似付かず、所詮御運の末なるか、いたはしや淺ましやと、屠所の歩みで歸りしが、天道のひかへつよきにや詞あの寺入の子を見れば、萬更烏を驚とも云はれぬ器量、一旦身がはりで歎き、此場さへ遁れたらば、直に河内へお供する思案、今暫くが大事の場所と、語れば女房、待んせや其松王と云ふ奴は三つ子の内の惡者、若君の顔はよう見知つて居るぞへ、サアそこが一か、ばちか生顔と死顔は相好の變る物、面ざし似たる小太郎が首、よもや贋とは思ふまじ、よし又それとあらはれたらば松王めを眞二つ、殘る奴輩切つて捨て、叶はぬ時は若君諸共、死出三途の御供と、胸をすゑたが一つの難儀今にも小太郎が母親迎ひに來たらばなんとせん、此義に當惑さしたは此難儀詞イヤ其事は氣づかひあ

るな、女同士の口先で、ちよぼくさ歎して見よ。イヤ其手ではゆくまい大事は小事より顯るゝ、ことによつたら母諸共、エーイヤこりややい、若君には替へられぬ、お主の爲を辨へよと、云ふに胸する云、さうでござんす、氣よはふては仕損ぜん、鬼になつてと夫婦は突立ち、互に顏を見合せて詞弟子と云へば我子も同然サア今日に限つて寺入したは、あの子が業か、母御の因果か、報ひはこちが火の車、追付け廻つて來ませうと妻が歎けば夫の目をすり、せまじき物は宮仕へと、俱に涙にくれ居たる斯る所へ春藤玄蕃、首見る役は松王丸、病苦を助くる駕乘物を門口にかき据れば、跡には大勢村の者つきしたがふて申上げます詞の皆これにをる者の子供が、手習ひに參つて居りまする。若取違へ首討てば取返しがなりませぬ、どうぞお戻し下されと願へば、玄蕃ヤアかましい蠅虫めら、詞うぬらが伴の事迄、身共が知つた事か、勝手次第に連失うと、叱りつくれば、松王丸、ヤレお待なされ暫くと駕より出るも刀を杖、詞憚りながら彼等迚も油斷はならぬ、病中ながら拙者めが見分の役務むるも、外に菅秀才の顏見知りし者なき故、今日の役目仕終すれば、病身の願、御暇下さるべしと、難有き御意の超き疎かにはいたされず菅相亟の所縁の者、此村に置くからは、百姓共もぐるになつて銘々が伴に仕立て助けて歸へる手もある事、コリヤやい百姓めら、ざわ〳〵とぬかさず共一人宛呼び出せ、面あらためて戻してくりよと、のつ引させぬ釘鎹、打てば響けの内には夫婦、兼て覺悟も今更に、胸蠢かす計りなり。表はそれとも白髮の親仁、門口より聲高に、長松よ〳〵と呼出せば、オツト答へて出てくるは腕白顏に墨べつたり、似ても似つかぬ雪と墨、之れではないと許しやろ詞岩松は居ぬかと呼ぶ聲に祖父樣、なんぢやとはしこくて出て來る子供のぐわんぜなき、顏は丸顏木みしり茄子、詮議に及ばぬ連うせうと、にらみ付けられ、オヽこわや詞嫁にもくはさぬ此孫を、命の花落のがれしと、祖父が抱へて走り行く。次は十五の涎くり、ぼんよ〳〵と親仁が手招き詞さゝよおれはモウ爰かう抱れていのと、甘へる

顔は馬顔で、聲きり〳〵すゝ、泣くな、泣いてやらうと干鮭を猫なで親がくは〳〵行く、詞私が伴は器量よし、お見違へ下さるなと、斷り云ふて呼び出すは、色白々と瓜實顔、こいつ胡亂と引とらへ、見れば首筋眞黑々〳〵、墨かあざかはしられども、こいつでないと突放す。其外山家、奥在所の子供殘らず呼出して、見せても見せても似ぬこそ道理、土が產した計芋、子ばかりよつて立歸る。スハ身の上と源藏も、妻の戸涙も胴をする、待つも程なく入來る兩人 詞ヤア源藏、此玄蕃が目の前で討つて渡そと請合ふた、菅才秀が首サア請取らう早く渡せと手詰の催促、ちつとも憶せず 詞かり初ならぬ右大臣の若君かき首、れち首にもいたされず、暫くは御用捨と立上るを松王丸詞ヤア其手はくわぬ、暫しの用捨とひまどらせ遁仕度しても、裏道へは數百人を付け置き、蟻の這出る所もない、生顔と死顔は相好がかはるなど、身代の贋首それもたべぬ、古手な事して後悔すなと云はれて、ぐつとせき上げ 詞ヤア入らざる馬鹿念、病ほうけた汝が眼玉がでんぐり返り、逆樣眼で見やうはしらず、紛れもなき菅秀才の首追付け見せう。オヽその舌の根の乾かぬ内に早く討て とく切れと玄蕃が權柄、ハツト計りに源藏は胸をすゑてぞ入にける。傍に聞き居る女房は、爰ぞ大事と心も空、檢使は四方八方に、眼を配る中にも松王、机文庫の數を見廻し詞ヤア合點のいかぬ、先達つて行んだ餓鬼等は以上八人、机の數が一脚多い、其伴はここに居るぞと、見咎められで戸涙ははつと詞イヤこりやけふ初めて寺、イヤ寺參りした子がござんす何馬鹿な。オヽそれ〳〵是が即ち、菅秀才の、お机文庫と、生地を隱した塗机、ざつとさばいて言ひ拔ける 詞何にもせよ隙どらすが油斷の元と玄蕃諸共つゞ立上る。こなたは手詰さ命の瀨戸際、奥にばつたり首打つ音、はつと女房胸を抱き、ふん込む足も、けしとむ内、武部源藏白塞に桶乘せてしづ〳〵出で、目遁りにさし置き 詞是非に及ばず菅秀才の御首、討奉る云はゞ、大切ない御首、根性をすゑてサア松王丸、しつかりと松〳〵サヨと、忍びの鍔くつろげて、虛と云はば切付けん、實と云は

ゞ助けんと堅唾を呑んでひかえ居るハ、、、、、何んのこれしきに性根所か、今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か金札か、地獄極樂の境、家來衆、源藏夫婦を取卷きめされ、かしこまつたと捕手の人數十手ふつと立かする女房戸涙も身をかため、夫はもとより一生懸命、サア實檢せよ檢分と云ふ一言も命かけ、うしろは捕手、向ふは曲者、玄蕃、始終眼を配り、爰ぞ絶對絶命と、思ふ内早や首桶引寄せ、ふた引きあけた首は家太郎、饗と云ふたら一討ちと、早抜きかける戸涙は祈願、天道樣、佛神樣あはれみ給へと女の念力、眼力光らす松王が、ためつ、すがめつ窺ひ見て詞ムウコリヤ菅秀才の首打つたは、まがひなし、相違なし、と云ふに恂り源藏夫婦、あたりきよろ〳〵見あはせり。檢使の玄蕃は見分の詞證據に、出かした〳〵よく打つた詞褒美にはかくまふた科ゆるしてくれる、イザ松王丸片時も早く時平公へお目にかけん、いかさま、隙どつたはお咎めもいかゞ。拙者はこれよりおいとまたまはり、病氣保養いたしたし、オヽ役目はすんだ、勝手にせよと、首受取り、玄蕃は館へ松王は、駕にゆられて立歸る。夫婦は門の戸びつしやりしめ、ものをも得云はず、青息吐息、五色の息を一時に、ほつと吹き出す計りなり、胸なでおろし源藏は天を拜し、地を拜し、詞ハアヽ有難や忝けなや、凡人ならぬ我君の、御聖德が顯はれて、松王めの眼がかすみ、若君と見定めて歸つたは、天成不思議のなす所、御壽命は萬萬年悦べ女房詞イヤもう、もう大抵の事ぢやござんせぬ、あの松王が目の玉へ菅相亟樣がはいつてござつたか、但し首が黄金佛ではなかつたか似たと云ふても瓦と金、寶の華の御運開きを餘り嬉しうて涙がこぼれるハアヽ有難や尊やと、悦びいさむ折からに、小太郎が母いきせきと、迎ひと見えて門の戸叩き詞寺入の子の母でござんす、今漸歸りましたと云ふ聲聞くより又恂り、一つ遁れてまた一つ、こりやマア何と、どうせうと、妻が騷げど夫は胴すゑ詞コリヤ最前云ふたは爰の事若君にはかへられぬ、狼狽者めと戸涙を引退け、門の戸ぐわらり引明れば、女は會釋し詞コレはまア〳〵御師匠樣で御座

りますか、わるさをお頼み申しますどこに居やるぞお邪魔であらにと、云ふを幸ひ詞イヤ奥に子供と遊んでゐます、連立つて歸られよと、眞顔で云へば詞オそんなら連れて歸りましよと、づつと通るを、後より只一討と切付くる、女もしれ者ひつばづし、逃げても逃さぬ源藏が、刄するどに切付くるを、我子の文庫ではつしとうけ止め詞コレ待つた待たんせコリヤどちうやと、刎る刄も用捨なく、刄切付くる文庫は二つ、中よりばらりと經帷子、南無阿彌陀佛の六字の族、あらはれ出しはコハいかにと、不思議の思ひに飆もなまり、すゝみかれてぞ見えにける。小太郎が母涙ながら詞若君菅秀才のお身がはり、お役に立てゝ下さつたか、まだか樣子が聞きたいと、云ふに悶り、詞シテ〳〵それは得心か。得心なりやこそ此經帷子六字の族、ムウ、シテ其計は何人の御内證と、尋る内に門口より詞梅は飛び櫻はかるゝ世の中に、なにとて松はつれなかるらん女房悅べ、悴はお役に立つたぞと、聞くよりわつとせき上げて、前後不覺に取亂す、ヤア未練者めと叱りつけ、ずつと通るは松王丸、見るに夫婦は二度悔り、夢か現か夫婦かと呆れて言葉もなかりしが、武部源藏威儀を正し詞一禮はまず跡の事、これまで敵と思ひし松王、打つて變つた所存はいかに、いぶかしさよと尋ぬれば、オヽ御不審尤、存知の通り我々兄弟三人は、めい〳〵に別れて奉公、情なや此松王は時平公に從ひ親兄弟とも、肉緣切り、御恩請けたる菅相亟樣へ敵對、主命とは云ひ乍ら皆これ此身の因果、何とぞ主從の緣切らんと作病がまへいとまの願ひ、菅秀才の首見たらば、暇やらんと今日の役目、よもや貴殿は討ちはせまい、なれども身がばりに立つべき一子なくんばいかゞせん、爰ぞ御恩の報ずる時と、女房千代と云ひ合せ二人の中の倅をば、先へ廻して、此の身替り、詞机の數を改めしも、我子は來たかと心のめど、菅相亟には我性根を見込み給ひ、何とて松のつれなからうぞとの御歌を、松はつれない〳〵と、世上の口にかゝる悔しさ推量あれ源藏殿、倅がなくばいつ迄も、人でなしと云はれんに、持つべきものは子なるぞやと、云ふに、

女房猫せき上げ、草葉のかげで小太郎が、聞いて嬉しう思ひましよ 詞もつべきものは子なるとは、あの子が爲によい手向、思へば最前別れた時いつにない跡追ふたを叱つた時の其の悲しさ、冥途の旅へ寺入と早虫がしらせたか、隣村へ行くと云ふて、道までいんで見たれ共、子を殺さしにおこして置いて、どうまあ内へいなるゝものぞいな死顔なりとも今一度見たさに未練と笑ふて下さんすな包みし祝儀はあの子が香奠四十九日の蒸物まで持つて寺入さすと云ふ悲しい事が世にあらうか育ちも生れも賤しくば殺す心もあるまいに死ぬる子は娼よしと美しう生れたがかあいやその身の不仕合せ何の因果に疱瘡まで仕舞ふた事ちやとせき上げて、かつぱと伏して泣きなければ、俱に悲しむ戸涙は立奇り 詞最前にナ、連合が身がはりと思ひ付いた傍へいてお師匠様今から頼み上げますと、云ふた時の事思ひ出せば、他人の私さへ骨身が碎ける、親御の身ではお道理と、涙添れば、イヤこれ御内證、コリヤ女房もなんでほへる、覺悟した御身がはり、内で存分ほへたではないか、御夫婦の手前ある、イヤ何源藏殿、申しつけてはおこしたれ共、定めて最後の節、未練な死を致したでござらうイヤ若君菅秀才の御身替りと云ひ聞かしたれば、いさぎよう首さしのべ。アノ遁げ隱れもいたさずにナ。につこり笑ふて。アノ笑いましたか、ムーーーハーーーーー出かし居りました、利口な奴利發な奴けな氣な八つや九つで、親に代つて恩送りお役に立つは孝行者手柄者と思ふから、思ひ出すは櫻丸御思も送らず先立し、嘔や草葉のかげよりも、うらやましから、けなりかろ、伴の事を思ふに付け、思ひ出さるゝ〳〵と、流石同腹同性を、忘れかねたる悲歎の涙 詞のう其の伯父御に小太郎が、逢ひますわいのと取付てわ、つと計に泣き沈む、勤きもれて菅秀才、一間の内より出で給ひ、我に代るとしるならば、此悲しみはさせまいに、可愛の者やと御袖を、しぼり給へば夫婦はぱつと俱にひたすら有難涙、次手乍らに若君樣に御みやげと、松王つゝ立ち。 詞申付けた用意の乘物、早く〳〵と呼はるぞ、ハツと答へて、家來共に

お目通りにかきすゆる。イザ御出で
と戸を開けば、菅相亟の御臺所、ノ
ウ母様か我子かと、御親子不思議の
御對面、源藏夫婦横手を打ち詞方々
と御行衛尋ねしに、いづくにか御座
なされし。サレバ〳〵北嵯峨の御隱
れ家、時平の家來が聞き出し召捕り
にむかふと聞きそれがし山伏の姿と
なり、危い所奪ひ取つたり、急ぎ河
内の國へお供なされ姫君にも御對面
コリヤ〳〵女房詞小太郎が死骸あの
乘物へうつし入れ、野邊の送りいと
なまん。アイと返事の其中に、戸涙
が心得抱いてくる、死骸を網代の乘
物へ、乘せて夫婦が上着をとれば、
あはれや内より覺悟の用意、下に白
無垢麻上下心を察して源藏夫婦詞の野
邊の送りに親の身で子を送る法はな
し、我々夫婦が代らんと、立寄れば
松王丸詞イヤ〳〵これ以我子にあら
ず、菅秀才の亡体をお供申す、いづ
れもは、門火門火と門火をたのみ賴
まるゝ、御豪若君諸共に、しやくり
上たる御涙冥土の旅へ寺入の、師匠
は彌陀佛釋迦牟尼佛、六道能化の弟
子になり、賽の河原で砂手本、いろ
は書く子をあへなくも、ちりぬる命
是非もなやあすの夜誰が添乳せん、
らむうゐめ見る親心、合掌と死出の
山けこえ合あさきゆめみし心地して
跡は門火にゐひもせす。京は故郷と
立別れ、鳥邊野さして連歸る。

御代の春壽萬歳

萬才

竹本南部太夫
竹本歳藏
竹本小春太夫
竹本鏡太夫
竹本長尾太夫
竹本陸路太夫
竹本播路太夫
豊竹駒尾太夫
竹本隅榮太夫
竹本町太夫
竹本貴風太夫
野澤吉彌
鶴澤重造
鶴澤友衛門
野澤吉左
野澤喜代之助
鶴澤叶太郎
鶴澤友作
竹野澤八造
竹野澤團二郎

（床本）

御代の春壽萬歳

よき事は亥の年にとそあら玉の初ツの詣でや諸人の壽き祝ふ萬歳がいさみ喜び立出て色にやかしこきそれさまなれどなじよラさつしやれたエ〜戀しらずイヤ悔ムなそつこへきのつつかぬ太夫じやなけれどいづれもさまへ改めて御祝儀申いれますと足を早めて來りけるめらば御祝申すと皷追取聲繕ひやんら目出たやなア鶴は千年の名鳥なり龜は萬年の御壽命保つ鶴にも勝れ龜にもます今日此お家をば長者がしんと祝ひ榮へましんまする建初の柱をば綾と錦でつゝんませて弓と箭をばつけさせて之が火防の柱とて鬼門を守らせ候らへける一本の柱は一チンの宮よ二本の柱は二千だり三本の柱は榊の明神四本の柱はシロタヤ天王五本の柱が牛頭天王六本の柱は六八幡とや七本柱が七尾天神八本の柱がい正八幡九本柱は熊の三社の大權現とヨナ十本の柱は十かせつ十一本の柱をばヨ十一面觀世音。十二本の柱かば藥師の十二神とや千本あまりの柱をば御取立悦こばれんならまことに目出度候へける、みろく十年辰の年諸神の立てたる御家は雨が降れども雨おちせず風が吹く共寶風吹ていよう春風ヨこちらへ吹てはは御萬歳萬歳樂まで祝ふて千秋萬ぢよをとり來榮へ賜ふは誠に目出度候へける是からそろ〳〵御萬歳をや萬歳エ〜萬歳オヤ萬歳、エ〜萬歳〳〵〳〵〳〵萬歳樂で御悦びださん度なア〳〵三度づるがまいにと仇な

（鶴澤友駒
鶴澤綱治

まいに取ばす昔又アハ〜〜〜御白川の法皇様の御時にコレハイ熊の山へ御參代のおりからにコレハイ諸太夫の裝束で左り折の烏帽子にてコレハイ其時京都まで登りてい大内の御門かやコレハイお江戸サアへ下りて將軍様の御門かやコレハイ旦那様の御門と三福は一類にてコレハイ元日にいさぎよく開くやきり〳〵〳〵オヤさらりエ〜さらりオヤさらり〳〵〳〵〳〵さアらりさつと歳藏開いたハ〜〜〜ひらいたりそひらいたりはたけたり出雲様の御身代は大きな物だにでつかいものだにコレハイ又もとりてば目出度物が參る何が〳〵參る御悦びの大判や小判がコレハイ佐渡でわいた金かやお江戸で出來た金かや旦那様へにくいヤレさい〳〵にやさくらニヤさくらへ、さくらニヤさくらこれささまの御座敷に柱取が始る子供衆もゆだんするなもつこをしよこない米だにコレハイ太夫さんあけないぜにや金がわくよふにコレハイ木ばちをもつたらすへいこめ升をもつたらはかりこめコレハイうつくしい姉様にや歳藏さんぞも内證でなら五兩や三兩いさつくれべにコレハイそこらの姉様のほんぼの通りやお花の通りおでぐらでんの出べその近所へハ〜〜〜〜まつちやよこ〳〵べつちやらこ、萬ちやらこまんざらやぼていとぶした歳藏あらせまい代〳〵榮御萬の長者なを萬歳樂まで祝いおゝてやんれげにや豊の時津風ふくや千秋さくいのに萬歳樂とぞ候らへける。

人形

太夫　吉田扇太郎
才藏　桐竹紋十郎

文樂座使用料　（一日）

時間／場所	收容人員		晝（自正午至午後五時）	夜（自午後六時至同十一時）	晝夜（自正午至午後十時）
文樂座	約850人	平日	80圓	100圓	160圓
		土曜	80圓	110圓	170圓
		日曜祭	90圓	110圓	180圓

◇上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◇割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

器具御使用料

器具	備考	數量	料金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回	15圓
同	同　普通燈ノミナラザルトキ	1回	20圓
所作舞臺	晝　夜	1回	10圓
活動寫眞設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回	50圓
同	晝夜通シ	1回	70圓
アプライトピアノ	晝　夜	1回	20圓
音樂譜面臺	晝　夜	1臺	10錢
アークスポット	晝夜4・5 KW	1臺	10圓
スポット	同　大（1000W）　小（500W）	1臺	5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺	5圓
シーリングスポット	100W　500W	1臺	3圓
サスペンシヤンライト	100W　500W	1臺	2圓
フットライト	20W　100W　7球	1本	1圓
ゼラチンペーパー		1枚1回	1圓
大衝立	晝　夜	1對	5圓
演壇設備	同	1回	2圓
其他	必要ニ應ジ實費		
受付2名、案内10名、電話係2名、下足2名	1日1人　1圓宛		16圓
冷風裝置使用料			無料
暖風ラヂエータ使用料			無料

大阪 歌舞伎座

元旦初日

東京大大新派總動員興行

ヒルの部

一、舊戀　一幕
二、母の土産　一幕
三、春色色懺悔　三場
四、愛憎峠　三場

ヨルの部

一、二家庭の内　袋地の家　一幕
二、明路暗路　三場
三、前科もの二人女　二幕
四、女の友情　六幕十一場

・設備斷然東洋第一！

アイス・スケート場

ウインタースポーツの王座！

歳末から新春への絶好の行樂！

毎日　午前十時　至午後十一時
日曜、祭日に限り午前九時より

一般外來入口　北側電車通り

・御觀劇の方は幕間の時間を利用御自由にお出入りして戴けます。

大阪 歌舞伎座 アイスス・ケート場

大阪劇場

近日封切
侠客曾我
若日本晴れ
且那
封切
與太者と小町娘
仲仙道を行く退屈男

鈴木の新内
花婿の寢言
侍丹三御殿騒動
入り娘

中座

元旦初日
序開　鶴退治
前狂言　壽初音萬歳　翌元　連中
奥州安達原三段目
聚名坡路口上

大薩摩演中

中狂言　維新の春　一幕
聚名狂言　石田局同能樂屋の場　二幕
吉例　英國孝子傳　二幕
大平手打連中
總對松島出
相撲め申候

浪花座

元旦初日
第一　新國劇
第二　薩摩隼人　八場　五幕
日光の卷　丹下左膳　七場　五幕

角座

關西新派劇（お目見得）
第一　ももんが大將　六場
第二　人斬供養　二幕　八場
第三　黎明の港　三景

松竹座

近日封切
コングの復讐
これがアメリカ艦隊
朱羅馬太平
金記

FP一號應答なし
泥百萬人の合醉夢唱
カイロの一夜

朝日座

近日封切
千葉周作
鞍馬天狗
右勤門
馬王物捕帖

忠次賣出す
唐人お吉
貞操問答
けゆく空

辨天座

近日封切
新野婚旅行
二奴狐三次山
百か
十み

與太者と花嫁
喧嘩一代密
殿樣と穩の松
人斬猪の

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひますとお仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙室を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します御座席では御遠慮下さい

御携帶品は

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。御歸りは混雜いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お場席券は

各自に御持ち下さいまし、切符に一枚づゝ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は場内にて出演者

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所で御自由にお飲み下さい。

寫眞撮影は絶對にお斷りいたします。

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

場合は事務室へお申込下さい『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります

當座御使用の

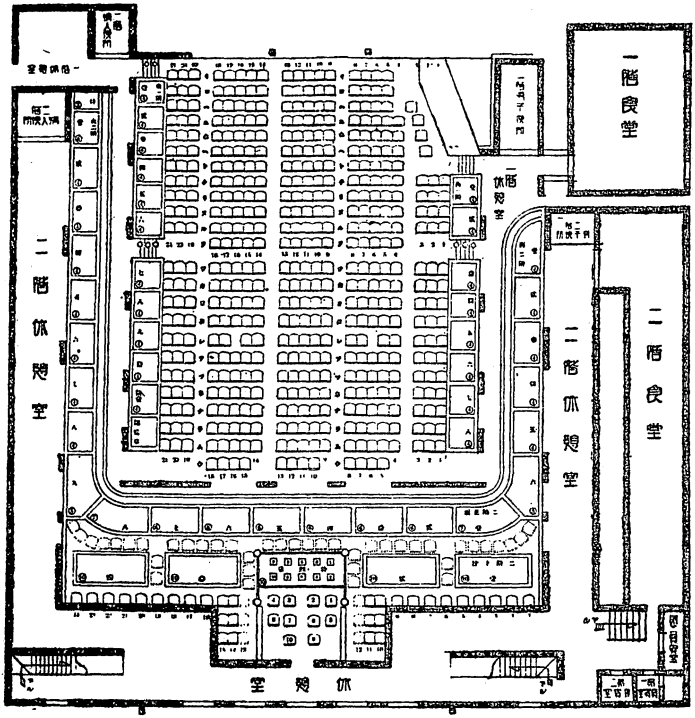
一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ゐますから御使用下さい。

御休憩の間は

ムシタオルはレートローション使用。

四ツ橋 文樂座
前賣切符專用電話南四七一一番
電話南(75)三〇三二番
三七八八番

文樂座御塲御席御案内



御、觀、覽、料、の外一切御不要の上大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出來、またお出入が御自由です。

前、賣、切、符、壹等お座席。壹等椅子席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御塲席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命の節お呼出しの電話は

南75四七一一番で御座ゐます

切符賣場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

尚多人數樣お團体樣のお申込も御相談いたします。

初春の御集會は

和やかな明るい感じの

大阪の宴會劇場で

文樂座の御宴會

金五圓（御一人様）

一等椅子席で御觀覽をねがひ
お食事は皆様本位の御定食
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ
床本入り番付つき
お座席希望は御一人につき五十錢
上り

□お申込は**二十人様以上を**お請け致します。
□記念撮影のお寫眞は終演と同時にお持歸り出きるやういたしております。
□お申込はお塲席其他の準備の都合上五日前にお願いたします
□お込は四ツ橋文樂座事務室へお願ひします。
□お電話の御用は前賣專用南四七一一・三七八八・三〇三二番へ

昭和九年十二月三十日印刷
昭和十年一月一日發行
發行人 大塚良三
大阪・四ツ橋文樂座
編輯 成山桂三
大阪市西區土佐堀通一丁目
印刷者 永井太三郎
印刷所 永井日英堂印刷所
大阪市西區土佐堀通一丁目

レートクレーム
アレを防いで
お肌を活きく〳〵と
清白(せいはく)な、やは肌とする
東京
平尾贊平商店